

# ポラーノの広場

宮沢賢治

青空文庫



前十七等官 レオーノ・キュースト誌

宮沢賢治 訳述

そのころわたくしは、モリーオ市の博物局に勤めて居りました。

十八等官でしたから役所のなかでも、ずうつと下の方でしたし、俸<sup>ほうきゆう</sup>給もほんのわずかでしたが、受持ちが標本の採集や整理で生れ付き好きなことでしたから、わたくしは毎日ずいぶん愉快にはたらきました。殊にそのころ、モリーオ市では競馬場を植物園に拵<sup>こしら</sup>え直すといっているので、その景色のいいまわりにアカシヤを植え込んだ広い地面が、切符

売場や信号所の建物のついたまま、わたくしどもの役所の方へまわって来たものですから、わたくしはすぐ宿直という名前で月賦で買った小さな蓄音器と二十枚ばかりのレコードをもって、その番小屋にひとり住むことになりました。わたくしはその馬を置く場所に板で小さなしきいをつけて一足の山羊を飼いました。毎朝その乳をしぼってつめたいパンをひたしてたべ、それから黒い革のかばんへすこしの書類や雑誌を入れ、靴もきれいにみがき、並木のポプラの影法師を大股にわたって市の役所へ出て行くのでした。

あのイーハトーヴオのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、

郊外のぎらぎらひかる草の波。

またそのなかでいっしょになったたくさんのひとたち、  
ファゼーロとロザーロ、羊飼のミーロや、顔の赤いこども  
たち、地主のテーモ、山猫博士のボーガント・デストウパ  
ーゴなど、いまこの暗い巨きな石の建物のなかで考えてい  
ると、みんなむかし風のなつかしい青い幻燈のように思わ  
れます。では、わたくしはいつかの小さなみだしをつけな  
がら、しずかにあの年のイーハトーヴオの五月から十月ま  
でを書きつけましょう。

一、遁げた山羊

五月のしまいの日曜でした。わたくしは賑にぎやかな市の教会の鐘の音で眼をさしました。もう日はよほど登って、まわりはみなきらきらしていました。時計を見るとちようど六時でした。わたくしはすぐチョッキだけ着て山羊を見に行きました。すると小屋のなかはしんとして藁わらが凹わんでいるだけで、あのみじかい角も白い髯も見えませんでした。

「あんまりいい天気なもんだから大将ひとりでかけたな。」

わたくしは半分わらうように半分つぶやくようにしながら、向うの信号所からいつも放して遊ばせる輪道の内側の野原、ポプラの中から顔をだしている市はずれの白い教会の塔までぐるっと見

まわしました。けれどもどこにもあの白い頭もせなかも見えていませんでした。うまやを一まわりしてみましたがやっぱりどこにも居ませんでした。

「いったい山羊は馬だの犬のように前居たところや来る道をおぼえていて、そこへ戻っているということがあるのかなあ。」

わたくしはひとりで考えました。さあ、そう思うと早くそれを知りたくてたまらなくなりました。けれども役所のなかとちがつて競馬場には物知りの年とつた書記も居なければ、そんなことを書いた辞書もそこらにありませんでしたから、わたくしは何ということなしに輪道を半分通つて、それからこの前山羊が村の人に連れられて来た路をそのまま野原の方へあるきだしました。

そこらの畑では燕えんばく麦もライ麦ももう芽をだしていましたが、これから何か蒔まくところらしくあたらしく掘り起こされているところもありました。

そしていつかわたくしは町から西南の方の村へ行くみちへはいってしまっていました。

向うからは黒い着物に白いきれをかぶった百姓のおかみさんたちがたくさん歩いてくるようすなのです。わたくしは気がついて、もう戻ってしまおうと思いました。全くの起きたままチョッキだけ着て顔もあらわず帽子もかむらず山羊が居るかどうかもわからない広い畑のまんなかへ飛びだして来ているのです。けれどもそのときはもう戻るのも工合が悪くなってしまうていました。向う



の人たちがじき顔の見えるところまで来ているのです。わたくしは思い切つて勢よく歩いて行つておじぎをして尋ねました。

「こつちへ山羊が迷つて来ていませんでしたでしょうか。」

女の人たちはみんな立ちどまってしまいました。教会へ行くところらしくバイブルも持っていたのです。

「こつちへ山羊が一足迷つて来たんですが、ご覧になりませんでしたでしょうか。」

みんなは顔を見合せました。それから一人が答えました。

「さあ、わたくしどもはまつすぐに来ただけですから。」

そうだ、山羊が迷つて出たときに人のようにみちを歩くのではないのです。わたくしはおじぎしました。

「いや、ありがとうございます。」女たちは行つてしまいました。もう戻ろう、けれどもいま戻るとあの女の人たちを通り越して行かなければならない、まあ散歩のつもりでもすこし行こう、けれどもさっぱりたよりない散歩だなあ、わたくしはひとりでにがわらいしました。そのとき向うから二十五六になる若者と十七ばかりのこどもとスコップをかついでやつて来ました。もう仕方ない、みかけだけにたずねて見よう、わたくしはまたおじぎしました。

「山羊が一足迷つてこつちへ来たのですが、ごらんになりませんか。でしたでしょうか。」

「山羊ですつて、いいえ。連れてあるいて遁にげたのですか。」

「いいえ、小屋から遁げたんです。いや、ありがとうございます。」「」

わたくしはおじぎをしてまたあるきだしました。するとそのこどもがうしろで云いました。

「ああ、向うから誰か来るなあ。あれそうでないかなあ。」  
わたくしはふりかえって指ざされたほうを見ました。

「ファゼーロだな、けれども山羊かなあ。」

「山羊だよ。ああきつとあれだ。ファゼーロがいまごろ山羊なんぞ連れてあるく筈ないんだから。」

たしかにそれは山羊でした。けれどもそれは別のので売りに町へ行くのかもしれない、まああの指導標のところまで行って見よう、

わたくしはそっちへ近づいて行きました。一人の頬の赤いチヨツキだけ着た十七ばかりの子どもが、何だかわたくしのらしい雌めすの山羊の首に帯皮をつけて、はじを持ってわらいながらわたくしに近よって来ました。どうもわたくしのらしいけれども何と云おうと思ひながら、わたくしはたちどまりました。すると子どもも立ちどまつてわたくしにおじぎしました。

「この山羊はおまえんだろう。」

「そうらしいねえ。」

「ぼく出てきたらたつた一足で迷っていたんだ。」

「山羊もやっぱり犬のように一ぺんあるいた道をおぼえているのかねえ。」

「おぼえてるとも。じゃ。やるよ。」

「ああ、ほんとうにありがとう。わたしはねえ、顔も洗わないで探しに来たんだ。」

「そんなに遠くから来たの。」

「ああ、わたしは競馬場に居るからねえ。」

「あすこから?」

子どもは山羊の首から帯皮をとりながら畑の向うでかげろうにぎらぎらゆれている、やっと青みがかつたアカシヤの列を見ました。

「すいぶん遠くまで来たんだねえ。」

「ああ、じゃ、僕こっちへ行くんだから。さよなら。」

「あ、ちよつと待って。ぼくなにかあげたいんだけどもなんにもなくてねえ。」

「いいや、ぼくなんにもいらないんだ。山羊を連れてくるのは面白かった。」

「だけれどねえ、それではわたしが気が済まないんだよ。そうだ、あなたは鎖はいらなの。」

わたくしは時計の鎖なら、なくても済むと思いつながら銀の鎖をはずしました。

「いいや。」

「磁石もついてるよ。」

すると子どもは顔をぱつと熱ほてらせましたが、またあたりまえに

なつて、

「だめだ、磁石じゃ探せないから。」とぼんやり云いました。

「磁石で探せないって？」私はびっくりしてたずねました。

「ああ。」子どもは何か心もちのなかにかくしていたことを見られたというように少しあわてました。

「何を探すつていうの。」

子どもはしばらくちゆうちよしていましたが、とうとう思い切つたらしく云いました。

「ポラーノの広場。」

「ポラーノの広場？ はてな、聞いたことがあるようだなあ。何だったろうねえ、ポラーノの広場。」

「昔ばなしなんだけれども、このごろまたあるんだ。」

「ああそうだ、わたしも小さいとき何べんも聞いた。野はらのまんなかの祭のあるところだろう。あのつめくさの花の番号を数えて行くというのだろう。」

「ああ、それは昔ばなしなんだ。けれども、どうもこの頃もあるらしいんだよ。」

「どうして。」

「だってぼくたちが夜野原へ出ていると、どこかでそんな音がするんだもの。」

「音のする方へ行ったらいいんでないか。」

「みんなで何べんも行ったらいいけれども、わからなくなるんだよ。」



「だって、聞えるくらいならそんなに遠い筈はないねえ。」

「いいや、イーハトーヴオの野原は広いんだよ。霧のある日ならミーロだって迷うよ。」

「そうさねえ、だけど地図もあるからねえ。」

「野原の地図ができてるの。」

「ああ、きつと四枚ぐらいにまたがつてるねえ。」

「その地図で見ると路でも林でもみんなわかるの。」

「いくらか変っているかもしれないが、まあ大体はわかるだろう。じゃ、お礼にその地図を買って送ってあげようか。」

「うん。」子どもは顔を赤くして云いました。

「きみはファゼーロって云うんだね。宛名をどう書いたらいいか

ねえ。」

「ぼく、ひまを見付けて、おまえんうちへ行くよ。」

「ひまつて、今日でもいいよ。」

「ぼく仕事があるんだ。」

「今日は日曜じゃないか。」

「いいえ、ぼくには日曜はないんだ。」

「どうして。」

「だって仕事をしなけあ。」

「仕事つてきみのかい。」

「旦那んさ。みんなもう行って畦<sup>あぜ</sup>へはいつてるんだ。小麦<sup>こむぎ</sup>の草を

とつているよ。」

「じやきみは主人のところに雇われているんだね。」

「ああ。」

「お父さんたちは。」

「ない。」

「兄さんか誰かは。」

「姉さんがいる。」

「どこに。」

「やっぱり旦那んところに。」

「そうかねえ。」

「だけど姉さんは山猫博士のところへ行くかも知れないよ。」

「何だい。その山猫博士というのは。」

「あだ名なんだ。ほんたうはデストウパーゴって云うんだ。」

「デストウパーゴ？　ボーガント・デストウパーゴかい。県の議員の。」

「ええ。」

「あいつは悪いやつだぜ。あいつのうちがこっちの方にあるのかい。」

「ああ、ぼくの旦那のうちから見え……。」

「おい、こら、何をぐずぐずしてるんだ。」うしろで大きな声がしました。見ると一人の赤い帽子をかぶった年老よりの頑丈よそうな百姓が革むちをもつて怒つて立っていました。

「もう一くぎりも働いたかと思つて来て見ると、まだこんなとこ

ろに立ってしゃべくってやがる。早く仕事へ行け。」

「はい、じゃさよなら。」

「ああさよなら、ぼくは役所からいつでも五時半には帰っているからね。」

「ええ。」

フアゼー口は水壺とホーをもつて急いで向うの路へはいつて行きました。百姓はこんどはわたくしに云いました。

「あなたはどこのお方だか知らないが、これからわしの仕事にいらぬお世話をして貰いたくないもんですな。」

「いや、わたしはね、山羊に遁げられてそれをたずねて来たら、あの子どもさんが連れて来ていたもんだからお礼を云っていたん

です。」

「いや、結構ですよ。山羊というやつはどうも足があつて歩くんでね。やいフアゼーロ、かけて行け、馬鹿、かけて行けつたら。」  
百姓は顔をまっ赤にして手をあげて革むちをパチツと鳴らししました。

「人を使うのに革むちを鳴らすなんて乱暴じゃないですか。」  
百姓はわざと顔を前につき出して云いました。

「このむちですかい。あなたはこの鞭むちのことを仰っしやっただんですか。この鞭はねえ、人を使う鞭ではありませんよ。馬を追う鞭ですよ。あっちへ馬が四足も行つてますからねえ。そらね、こんなふうに。」

百姓はわたくしの顔の前でパチツパチツとはげしく鞭を鳴らし  
ました。わたくしはさあつと血が頭にのぼるのを感じました。け  
れどもまた、いま争うときでないと考えて山羊の方を見ました。  
山羊はあちこち草をたべながら向うに行っていました。百姓はフ  
アゼーロの行った方へ行き、わたくしも山羊の方へ歩きだしまし  
た。山羊に追いついてからふりかえって見ますと畑いちめん紺い  
ろの地平線までぎらぎらのかげろうで百姓の赤い頭巾もみんなご  
ちやごちやにゆれていました。その向うの一そう烈しいかげろう  
の中でピカツと白くひかる農具と黒い影法師のようにあるいてい  
る馬と、ファゼーロかそれともほかのこどもか、しきりに手をふ  
つて馬をうごかしているのをわたくしは見ました。

## 二、つめくさのあかり

それからちようど十日ばかりたつて、夕方、わたくしが役所から帰って両手でカフスはずしてしまいましたら、いきなりあのファゼーロが、戸口から顔を出しました。そしてわたくしが、まだびつくりしているうちに、

「とうとう来たよ、今晚は。」と云いました。

「ああ、先頃はありがとう。地図はちゃんと仕度しておいたよ。

この前の音は今でもするの。」

「すると、昨夜なんかとてもひどいんだ。今夜はもうぼくどう



しても探そうとおもつて羊飼のミーロと二人で出て来たんだ。」

「うちの方は大丈夫かい。」

「うん。」フアゼーロは何だか少しあいまいに返事しました。

「きみの旦那はなかなか恐い人だねえ、何て云うんだ。」

「テーモだよ。」

「テーモ、やっぱし何だか聞いたような名だなあ。」

「聞いたかも知れない。あちこち役所へ果物だの野菜だの納めて  
いるんだから。」

「そうかねえ。とにかく地図はこれだよ。」

わたくしは戸口に買って置いた地図をひろげました。

「ミーロも呼んでもいいかい。」

「誰か来てるのか、いいとも。」

「ミーロ、おいで、地図を見よう。」

すると山羊小屋の中からファゼーロよりも三つばかり年上の、ちやんときやはんをはいて、ぼろぼろになった青い皮の上着を着た顔いろのいいわか者が出てきて、わたくしにおじぎしました。

「おや、ぼくは地図をよくわからないなあ、どっちが西だろう。」

「上の方が北だよ。そう置いてごらん。」ファゼーロはおもての景色と合せて地図を床に置きました。

「そら、こつちが東でこつちが西さ。いまぼくらのいるのはここだよ。この円くなった競馬場のここのとこさ。」

「乾溜工場はどれだろう。」ミーロが云いました。

「乾溜工場って、この地図にはないね、こつちかしら。」  
わたくしは別のをひろげました。

「ないなあ、いつごろからあるんだい。」

「去年からだよ。」

「それじゃないんだ。この地図はもつと前に測量したんだから。  
その工場はどんなところにあるの。」

「ムラードの森のはずれだよ。」

「ああ、これかしら、何の木だい、なら榎かかぼ樺だらう。唐檜やサイプレスではないね。」

「榎と樺だよ。ああこれか。ぼくはねえ、どうも昨夜の音はここから聞えたと思うんだ。」

「行こう行こう、行って見よう。」ファゼーロはもう地図をもつてはねあがりました。

「わたしも行つていいかい。」

「いいとも、ぼくそう云いたくていたんだ。」

「じゃわたしも行こう。ちよつと待つて。」

わたくしは大急ぎで仕度をしました。どうせ月が出るけれども地図が見えないといけないと思つて、ガラス函のちようちんも持ちました。

「さあ行こう。」わたくしは、ばたんと戸をしめてファゼーロとミーロのあとに立ちました。

日はもう落ちて空は青く古い池のようになっていました。そこ

らの草もアカシヤの木も一日のなかでいちばん青く見えるときでした。

わたくしどもはもう競馬場のまん中を横截<sup>ぎ</sup>ってしまつてまつすぐに野原へ行く小さなみちへかかつていました。ふりかえつてみると、わたくしの家がかなり小さく黄いろにひかつていました。

「ポラーノの広場へ行けば何があるつて云うの？」

ミーロについて行きながらわたくしはファゼーロにたずねました。

「オーケストラでもお酒でも何でももあるつて。ぼくお酒なんか呑みたくはないけれど、みんなを連れて行きたいんだよ。」

「そうだって云つたねえ、わたしも小さいとき、そんなこと聞いた。

たよ。」

「それに第一にね、そこへ行くと誰でも上手に歌えるようになるつて。」

「そうそう、そう云った。だけどそんなことがいまでもほんとうにあるかねえ。」

「だつて聞えるんだもの。ぼくは何もいらなけれど上手にうたいたいんだよ。ねえ。ミーロだつてそうだろう。」

「うん。」ミーロもうなずきました。

元来ミーロなんかよほど歌がうまいのだらうとわたくしは思いましました。

「ぼくは小さいときはいつでもいまごろ野原へ遊びに出た。」フ

アゼー口が云いました。

「そうかねえ。」

「するとお母さんが、行つておいで、ふくろうにだまされないようにおしつて云うんだ。」

「何て云うつて。」

「お母さんがね、行つておいで、ふくろうにだまされないようにおしつて云うんだよ。」

「ふくろうに？」

「うん、ふくろうにさ。それはね、僕もつと小さいとき、それはもうこんな小さいときなんだ、野原に出たろう。すると遠くで、誰だか食べた、誰だか食べた、というものがあつたんだ。それが

ふくろうだったのよ。僕ばかな小さいときだから、ずんずん行つたんだ。そして林の中へはいつてみちがわからなくなつて泣いた。それからいつでも、お母さんそう云つたんだ。」

「お母さんはいまどこにいるの。」わたくしはこの前のことを思いだしながら、そつとたずねました。

「居ない。」ファゼーロはかなしそうに云いました。

「この前きみは姉さんがデストウパーゴのところへ行くかもしれないつて云つたねえ。」

「うん、姉さんは行きたくないんだよ。だけど旦那が行けつて云うんだ。」

「テームがかい。」



「うん、旦那は山猫博士がこわいんだからねえ。」

「なぜ山猫博士って云うんだ。」

「ぼくよくわからない。ミーロは知ってるの？」

「うん。」ミーロはこつちをふりむいて云いました。

「あいつは山猫を釣つてあるいて外国へ売る商売なんだって。」

「山猫を？　じゃ動物園の商売かい。」

「動物園じゃないなあ。」ミローもわからないというふうにだまつてしまいました。

そのときはもう、あたりはとつぷりくらくらくなって西の地平線の上が古い池の水あかりのように青くひかるきり、そこらの草も青ぐろ黝くかわっていました。

「おや、つめくさのあかりがついたよ。」ファゼーロが叫びました。

なるほど向うの黒い草むらのなかに小さな円いぼんぼりのような白いつめくさの花があつちにもこつちにもならば、そこらはむつとした蜂蜜のかおりでいっぱいでした。

「あのあかりはねえ、そばでよく見るとまるで小さな蛾の形の青じろいあかりの集りだよ。」

「そうかねえ、わたしはたった一つのあかしだと思っていた。」

「そら、ね、ごらん、そうだろう、それに番号がついてるんだよ。」

わたしたちはしゃがんで花を見ました。なるほど一つ一つの花

にはそう思えばそうというような小さな茶いろの算用数字みたいなものが書いてありました。

「ミール、いくらだい。」

「一千二百五十六かな、いや一万七千五十八かなあ。」

「ぼくのは三千四百二十……六だよ。」

「そんなにはつきり書いてあるかねえ。」

わたくしにはどうしても、そんなにはつきりは読むことができませんでした。けれども花のあかりは、あつちにもこつちにももうそこらいっぱいでした。

「三千八百六十六、五千まで数えればいいんだから、ポラーノの広場はもうじきそこらな筈なんだけれども。」

「だってきつぱりきみらの云うような、いい音はしないじゃないか。」

「いまに聞えるよ。こいつは二千五百五十六だ。」

「その数字を数えるというのはきつとだめだよ。」

とうとうわたくしは云いました。

「どうして？」ファゼーロもミーロもまっすぐに立ってわたくしを見ています。

「なぜって第一わたしは花にそんな数字が書いてあるのでなくて、それはこっちの目のまちがいだろうと思うんだ。もしほんとうにいまにその音が聞えてきたら、まっすぐにそちに行くのがいちばんいいだろうと思うんだ。とにかくもつとさききへ行つてようじ

やないか。ここらならわたしだって度々来ているんだから。ここらはまだあの岐れみちのまつ北ぐらいにしかなくてないんだ。ムラードの森なんか、まだよつぽどあるだろう。ねえ、ミーロ君。」

「じゃ、行こう、まあもつと行って花の番号を見てごらん。やつぱり二千とか三千とかだから。」

ミーロはうなずいてあるきだしました。ファゼーロもだまつてついて行きました。わたくしどもは、じつにいったいに青じろいあかりをつけて、向うの方はまるで不思議な縞物しまのやうに幾条にも縞になった野原を、だまつてどんどんあるきました。その野原のはずれのまつ黒な地平線の上では、そらがだんだんにはがねぶい鋼の

いろに変わって、いくつかの小さな星もうかんできましたし、そこらの空気もいよいよ甘くなりました。そのうち何だかわたくしどもの影が前の方へ落ちていようなので、うしろを振り向いて見ますと、おお、はるかなモリーオの市のぼおつとにごった灯照りのなかから、十六日の青い月が奇体に平べったくなくなって半分のぞいているのです。わたくしどもは思わず声をあげました。ファゼーロは、そっちへ挨拶するように両手をあげてはねあがりました。にわかにはぼんやり青白い野原の向うで、何かセロかバスのやうな顫いがしずかに起りました。

「そら、ね、そら。」ファゼーロがわたくしの手を叩きました。わたくしにもまっすぐに立って耳をすましました。音はしずかに

しずかに眩つぶやくようにふるえています。けれどもいったいどっちの方が、わたくしは呆れてつつ立ってしまいました。もう南でも西でも北でもわたくしどもの来た方でも、そう思つて聞くと、地面の中でも、高くなったり、低くなったり、たのしそうに、たのしそうに、その音が鳴っているのです。

それはまた一つや二つではないようでした。消えたりもつれり、一所になつたり、何とも云われないのです。

「まるで昔からののはなしの通りだねえ。わたしはもうわからなくなつてしまつた。」

「番号はここらもやっぱり二千三百ぐらいだよ。」ファゼーロが月が出て一そう明るくなつた、つめくさの灯をしらべて云いまし

た。

「番号なんか、あてにならないよ。」わたくしも<sup>かが</sup>屈みました。

そのときわたくしは一つの花のあかしから、も一つの花へ移って行く黒い小さな蜂を見ました。

「ああ、蜂が、ごらん、さつきからぶんぶんふるえているのは、月が出たので蜂が働き出したのだよ。ごらん、もう野原いっぱい蜂がいるんだ。」

これでわかったろうとわたくしは思いましたが、ミールもファゼールもだまってしまってなかなか承知しませんでした。

「ねえ、蜂だろう。だからあんなに野原中どこから来るか知れなかったんだよ。」



ミール口がやつと云いました。

「そうでないよ。蜂ならばくはずつと前から知っているんだ。けれども昨夜はもつとはつきり人の笑い声などまで聞えたんだ。」

「人の笑い声、太い声でかい。」

「いいや。」

「そうかねえ。」

わたくしはまたわからなくなつて腕を組んで立ちあがつてしまいました。

そのときでした。野原のずうつと西北の方で、ぼお、とたしかにトローンボーンかバスの音がきこえました。わたくしはきつとそつちを向きました。するとまた西の方でもきこえるのです。わ

たくしはおもわず身ぶるいしました。野原ぜんたいに誰か魔術でもかけているか、そうでなければ昔からの云い伝え通り、ひるには何も無い野原のまんやかに不思議に楽しいポラーノの広場ができるのか、わたくしは却ってひるの間役所で標本に札をつけたり書類を所長のところへ持って行ったりしていたことが、別の世界のことのように思われてきました。

「やっぱり何かあるのかねえ。」

「あるよ。だってまだこれどこではないんだもの。」

「こんなに方角がわからないとすれば、やっぱり昔の伝説のようにあかしの番号を読んで行かなければならないんだが、ぜんたい、いくらまで数えて行けばポラーノの広場に着くって？」

「五千だよ。」

「五千？　ここはいくらと云ったねえ。」

「三千ぐらいだよ。」

「じゃ、北へ行けば数がふえるか西へ行けばふえるか、しらべて見ようか。」

その時でした。

「ハツハツハ。お前たちもポラーノの広場へ行きてえのか。」うしろで大きな声で笑うものがいました。

「何だい、山猫の馬車別べつとう当め。」ミール口が云いました。

「三人で這いまわって、あかりの数を数えてるんだな。ハツハツハ。」足のまがった片眼のその爺じいさんは上着のポケットに手を入

れたまま、また高くわらいました。

「数えてるさ、そんなら、じいさんは知ってるかい。いまでもポラーノの広場はあるかい。」ファゼーロが訊きました。

「あるさ。あるにはあるけれどもお前らのたずねているような、這いつくばって花の数を数えて行くような、そんなポラーノの広場はねえよ。」

「そんならどんなんがあるんだい。」

「もつといいのがあるよ。」

「どんなんだい。」

「まあ、お前たちには用がなかるうぜ。」じいさんはのどをくびつと鳴らしました。

「じいさんはしじゅう行くかい。」

「行かねえ訳でもねえよ、いいところだからなあ。」

「じいさんは今夜は酔ってるねえ。」

「ああ上等の蘘酒をやったからな。」じいさんはまたのどをくびつと鳴らしました。

「ぼくたちは行けないだろうかねえ。」

「行けねえよ、あっつけねえ、とうとう悪魔にやられた。」じいさんは額ひたいを押えてよろよろしました。甲かぶとむしが飛んで来て、ぶつかったようすでした。

ミーロが云いました。

「じいさん、ポラーノの広場の方角を教えてくださいたら、おいらあ、

じいさんに悪魔の歌をうたつてきかせるぜ。」

「縁起でもねえ、まあもつと這はいまわつて見ねえ。」

じいさんはぷりぷり怒つてぐんぐんつめ草の上をわたつて南の方へ行つてしまいました。

「じいさん。お待ちよ。また馬を冷しに連れてつてやるからさ。」  
ファゼーロが叫びましたが、じいさんはどんどん行つてしまいました。ミーロはしばらくだまつていましたが、とうとうこらえきれないらしく、

「おい、おれ歌うからな。」と云いだしました。

ファゼーロはそれどころではないようでしたが、わたくしは前からミーロは歌がうまいだろうと思つていたので手を叩きまし

た。ミールは上着やシャツの上のぼたんをはずして息をすこし吸  
いました。

「いのししむしやのかぶとむし

つきのあかりもつめくさの

ともすあかりも眼に入らず

めくらめつぽに飛んで来て

山猫馬丁ぼていにつきあたり

あわててひよろひよろ

落ちるをやつとふみとまり

いそいでかぶとをしめなおし

月のあかりもつめくさの

ともすあかりも目に入らず

飛んでもない方に飛んで行く。」

ところが、そのじいさんの行った方から細い高い声で、

「ファゼーロ、ファゼーロ。」と呼んでいるようです。

「ああ、姉さん、いま行くよ。」ファゼーロがそっちへ向いて高く叫びました。向うの声はやみました。

「だめだなあ、きつと旦那が呼んでるんだ。早く森まで行ってみればよかったねえ。」

ミーロが俄かに勢がついて早口に云いました。

「大丈夫だよ。おれはね、どうもあの馬車別べつとう当だの町の乾物屋のおやじだの、あやしいと思っていたんだ。このごろはいつでも



酔っているんだ、きつとあいつらがポラーノの広場を知ってるぜ。それにおれは野原でおかしな風に枯草を積んだ荷馬車に何べんもあつてるんだ。ファゼーロ、お前ね、なんにも知らないふりして今夜はうちへ帰って寝ろ。おれはきつと五六日のうちにポラーノの広場をさがすから。」

「そうかい。ぼくにはよくわからないなあ。」

そのときまた声がしました。

「ファゼーロ、おいで。お使いに町へ行くんだって。」

「ああいま行くよ。ぼくは旦那のところへまっすぐに行くんだが、おまえはひとりで競馬場へ帰れるかい。」

「帰れるとも、ここらはひるまならたびたび来るとこなんだ。じ

や、地図はあげるよ。」

「うん、ミーロへやってこう。ぼくひるは野原へ来るひまがないんだから。」

そのとき向うのつめくさの花と月のあかりのなかに、うつくしい娘が立っていました。ファゼーロが云いました。

「姉さん、この人だよ。ぼく地図をもらったよ。」

その娘はこっちへ出てこないで、だまっておじぎをしました。わたくしもだまっておじぎをしました。

「じゃ、さよなら、早く行かなくちや。」

ファゼーロは走り出しました。ロザーロは、もいちどわたくしどもに挨拶して、そのあとから急いで行きました。ミーロはだま

つて北の方を向いて耳にたなごころをあてていました。わたくしはポラーノの広場というのはこういう場所をそのまま云うのだ、馬車別当だのミーロだのまだ夢からさめないんだと思いつながら云いました。

「ミーロ、おまえの歌は上手だよ。わざわざ、ポラーノの広場まで習いに行かなくてもいいや。じゃさよなら。」

ミーロは、ていねいにおじぎをしました。わたくしはそしてそのうつくしい野原を、胸いっぱいには蜂蜜のかおりを吸いながら、わたくしの家の方へ帰ってきました。

### 三、ポラーノの広場

それからちようど五日目の火曜日夕方でした。その日はわたくしは役所で死んだ北極熊を剥製はくせいにするかどうかについてひどく仲間と議論をして大へんむしゃくしゃしていましたから、少し気を直すつもりで酒石酸しゆせきさんをつめたい水に入れて吞んでいましたら、ずうつと遠くですきとおった口笛が聞えました。その調子はたしかにあのファゼーロの山羊をつれて来たり野原を急いで行ったりする気持そっくりなので、わたくしは思わず、とうとう来たな、とつぶやきました。

やっぱりファゼーロでした。まだわたくしがその酒石酸のコツプを呑みほさないうちに、もう顔をまっ赤にして戸口に立ってい

ました。

「わかったよ、とうとう。僕ゆうべ行くみちへすつかり方角のしるしをつけて置いた。地図で見てもわかるんだ。今夜ならもう間違ひなくポラーノの広場へ行ける。ミー口はひるのうちから行つていてぼくらを迎えに出る約束なんだ。ぼく行つて見て、ほんとうだったら、あしたはもうみんなつれて行くんだ。」

わたくしも釣り込まれて胸を躍おどらせました。

「そうかい、わたしも行こう。どんななりして行つたらいいかねえ。どんな人が来てるだろうねえ。」

「どんななりでもいいじゃないか。早く行こう。来てる人が誰だか、ぼくもわからないんだ。」

わたくしは大急ぎでネクタイを結んで新らしい夏帽子を被<sup>かぶ</sup>つて外へ出ました。わたくしどもがこの前別れたところへ来たころは丁度夕方の青いあかりが、つめくさにぼんやり注いでいて、その葉の爪<sup>つめ</sup>の痕<sup>あと</sup>のやうな紋<sup>もん</sup>も、もう見えなくなりかかったときでした。ファゼーロは爪立てをしてしばらくあちこち見まわしていました。俄かに向うへ走って行きました。ファゼーロはしばらく経つてぴたりと止まりました。

「あ、こいつだ、そらね。」

見るとそこにはファゼーロが作ったらしく、一本の棒を立ててその上にボール紙で矢の形を作つて北西の方を指すようにしてありました。

「さあ、こつちへ行くんだ。向うに小さな樺かばの木が二本あるだろう。あすこが次の目標なんだよ。暗くならないうちに早く行こう。」

「ファゼーロはどんどん走り出しました。」

ほんとうにそこらではもうつめくさのあかりがつきはじめていました。わたくしはまたファゼーロのあとについて走りましました。

「早く行こう、早く行こう、山猫の馬車別当なんかに見付かつちやうるさいや。」

「ファゼーロはふりかえって、そんなことを云いながら走りつづけました。」

けれどもさつき見た二本の樺の木まではなかなかすぐではありませんでした。

ファゼーロはよく走りました。

わたくしもずいぶん本気に走りました。

やっとそこに着いてファゼーロが立ちどまったときは、あたりはもうすっかり夜になっていて、樺の木もまつ黒にそらにすかし出されていました。

つめくさの花はちようどその反対に明るく、まるで本当の石英ランプでできているようでした。

そしてよく見ますと、この前の晩みんなで云ったように、一々のあかしは小さな白い蛾がのかたちのあかしから出来て、それが実に立派にかがやいて居りました。処々には、せいの高い赤いあかりもりんと灯り、その柄えの所には緑いろのしやんとした葉もついていたのです。ファゼーロはすばやくその樺の木にのぼっていま



した。そしてしばらく野原の西の方をながめていましたが、いきなりぶらさがってはねておりて来ました。

「次のしるしはもう見えないんだ。けれども広場はちょうどここからまっすぐ西になっている筈だから、あの雲の少し明るいところを目あてにして歩いて行こう。もうそんなに遠くないんだから。」

わたくしどもはまたあるきだしました。俄かにどこからか甲虫はがねの鋼の翅がりいんりいんと空中に張るような音がたくさん聞えてきました。

その音にまじってたしかに別の楽器や人のがやがや云う声が、時々ちらつときこえてまたわからなくなりました。

しばらく行ってファゼーロがいきなり立ちどまって、わたくしの腕をつかみながら、西の野原のはてを指しました。わたくしもそつちをすかして見てよろよろして眼をこすりました。そこには何の木か七八本の木がじぶんのからだからひとりで光でも出すように青くかがやいて、そこらの空もぼんやり明るくなっているのでした。

「ファゼーロかい。」いきなり向うから声がしました。

「ああ、来たよ。やっているかい。」

「やってるよ。とてもにぎやかなんだ。山猫博士も来ているよう  
だぜ。」

「山猫博士？」ファゼーロはぎくつとしたようでした。

「けれどもいっしょに行こう。ポラーノの広場は誰だつて見附けた人は行つていいんだから。」

「よし行こう。」ファゼーロははつきり云いました。

わたくしどもはそのあかりをめあてにあるいて行きました。

ミーロもファゼーロも何か大へん心配なようでした。さつぱり物も云わなくなつてしまつたのです。そうなるとこんどはわたくしが元気がついて来ました。一体昔ばなしの通りのことが本当にあるのだろうか、それとも何かほかのことだろうか、山猫博士がここへ来て何をしているのだろうか。もうどうしても行つて見たくてたまらなくなりました。殊にその日はわたくしはまだ俸給の残りを半分以上もつていましたし、もしお金を払わなければなら

ないとしてもファゼーロとミーロにご馳走するぐらい大丈夫だと考えたのです。

「いいよ、こんどはね、わたしについて来るんだよ。山猫博士なんか少しもこわいことはないんだから。」

わたくしはもうまつさきに立ってどんどん急ぎました。甲虫の翅の音はいよいよ高くなり青い木はその一つ一つの枝まではずきり見えて来ました。木の下では白いシャツや黒い影やみんながちらちら行ったり来たりしています。誰かの片手をあげて何か云っているのも見えました。

いよいよ近くなってわたくしは、これこそはもうほんもののポラーノの広場だと思ってしまいました。さっきの青いのは可成かなり大

きはんの木でしたが、その梢からはたくさんのもールが張られてその葉まできらきらひかりながらゆれていました。その上にはいろいろな蝶や蛾が列になってぐるぐるぐるぐる輪をかいていたのです。

うつくしい夏のそらには銀河がいまわたくしどもの来た方からだんだんそっちへまわりかけて、南のまっくろな地平線の上のあたりではぼんやり白く爆発したようになっていました。つめくさのかおりやら何かさまざまの果物のかおり、みんなの笑い声、そのうちにとうとうみんなは組になって踊りだしました。七八人のようではありましたが、たしかにもうほんもののオーケストラが愉快そうなワルツをやりはじめました。一まわり踊りがすむとみ

んなはばらばらになってコップをとりました。そしてわあわあ叫びながら呑みほしています。その叫びは気のせいか、デストウパーゴ万歳というようにもきこえました。

「あれが山猫博士だな。」ファゼーロが向うの卓にひとり坐つて、がぶがぶ酒を呑んでいる黄いろの縞のシャツと赤皮の上着を着た肩はばのひろい男を指さしました。

誰か六七人コンフェットウや紐を投げましたので、それは雪のように花のようにきらきら光りながらそこらに降りました。

わたくしどもはもう広場の前まで来て立ちどまりました。

ちようどそのときデストウパーゴがコップをもつて立ちあがり  
ました。



になれと思い切って二人をつれて帽子をとりながら、あかりの中へはいりました。するとみんなは一ぺんにさわぎをやめて怪げんそうな顔つきでわたくしどもを見ました。それからデストウパーゴの方を見ました。

するとデストウパーゴはちよつと首をまげて考えました。どうもわたくしのことを見たことはあるが考え出せないという風でした。するとそばへ一人の夏フロックコートを着た男が行って何か耳うちしました。デストウパーゴは不機嫌そうな一べつをわたくしに与えてから仕方なさそうにうなずきました。

するとやはりフロックを着てテーモが来ていました。そのテーモが柄のついたガラスの杯を三つもって来て、だまってわたくし



からミール、ファゼーロと渡しました。ファゼーロに渡しながらだまつてにらみつけました。ファゼーロはたじたじ後あとずさ退りしました。給仕がそばからレットルのない大きな瓶びんからいままでもみの呑んでいた酒を注ごうとしました。わたくしはそこで云いました。

「いや、わたしたちはね、酒は呑まないんだから炭酸水でもおくれ。」

「炭酸水はありません。」給仕が云いました。

「それならただの水をおくれ。」わたくしは云いました。

どういいうわけかみんなしいんとして穴の明くほどわたくしどものことばかり見えています。わたくしも少し照れてしまいました。

「いや、デストウパーゴさまは人に水をごちそうはなさいませんよ。」テームが云いました。

「ごちそうになろうというんでないんです。野原のまんなかで、つめくさのあかりを数えて来たポラーノの広場で、わたくしは渴いて水が呑みたいのです。」

もうゆきがかりで仕方ないと私は思つてはつきり云いました。

「つめくさのあかり、わっはっは。」テームはわらいだしました。デストウパーゴもわらいました。みんなもそのあとについてわらいました。

「ポラーノの広場もな、お気の毒だがデストウパーゴさまのものだよ。」テームがしずかに云いました。そのとき山猫博士が云い

ました。

「よし、よし、まあすきななら水をやっておけ。しかしどうも水を呑むやつらが来るとポラーノの広場も少ししらばつくれるね。」

「はい。」

「テームはおじぎをしてそれからそつとファゼーロに云いました。」

「ファゼーロ、何だつて出て来たんだ。早く失せろ。帰ったら立てないくらい引っぱたくからそう思え。」

「ファゼーロはまた後退りしました。」

「その子どもは何だ。」

「デストウパーゴがききました。」

「ロザーロの弟でございます。」

「テームがおじぎをして答えました。するとデストウパーゴは返事をしないで向うを向いてしま

ました。そのとき楽隊が何か民謡風のをやりはじめました。

みんなはまた輪になって踊りはじめようとなりました。するとデストウパーゴが、

「おいおい、そいつでなしにあのキャッツホイスキーというやつをやってもらいたいね。」

すると楽隊のセロをもった人が、

「あの曲はいま譜がありませんので。」するとデストウパーゴは、もうよほど酔っていました、

「や、れ、やれ、やれと云ったらやらんか。」と云いました。

楽隊は仕方なくみんな同じ譜で、キャッツホイスキーをやりはじめました。

みんなも仕方なく踊りはじめました。するとデストウパーゴも踊りだしました。それがみんなといっしょに踊るのではなくて、わざとみんなの邪魔をするようにうごきまわるのです。

みんなは呆れて<sup>あき</sup>だんだんやめて、ぐるつとデストウパーゴのまわりに立ってしまいました。するとデストウパーゴはたった一人でふざけて踊りはじめました。しまいにはみんなの前を踏むようになかたちをして行ったり、いきなり喧嘩でも吹っかけるときのように、はねあがったり、みんなはそのたんびにざわざわ遁<sup>に</sup>げるようになりしました。さつきの夏フロックを着た紳士が心配そうにもみ手をしながら何か云おうとするのですがデストウパーゴはそれさえおどして引っこませてしまいました。楽隊はしばらくしかた

なくやっついていましたがとうとう呆れてやめてしまいました。するとデストウパーゴも労れたように椅子へ坐つて、

「おい、注げ。」と云いながらまたつづけざまに二杯ひっかけました。

するとミーロの仲間らしいものが二人で出て来てミーロに云いました。

「おいミーロ、お前もせっかく来たんだから一つうたつて聞かして呉んな。」

「みんなさつきから、うたつたり踊つたりして、つかれてるんだから。」

ミーロは、

「だめだよ。」と云ってその手をふりはらいましたが、実は、はじめから歌いたくて来たのですから、ことに楽隊の人たちが歌うなら伴奏しようというように身構えたので、ミーロは顔いろがすっかり薔薇いろばらになってしまつて眼もひかり息もせわしくなつてしまいました。

わたくしも思わず、

「やれ、やれ、立派にやるんだ。」と云いました。

するとミーロはどうとう決心したようにいきなり咽喉のど掻かきはだけて、はんの木の下の空箱の上に立つてしまいました。

「何をやりましょう。」セロの人がわらつてききました。

「フローゼントリーをやってください。」

「フローゼントリー、譜もないしなあ、古い歌だなあ。」

楽員たちはわらつて顔を見合せてしばらく相談していましたが、「そいじゃね、クラリネットの人しか知つてませんから、クラリネットとね、それから鼓つづみで調子だけとりますから、それでよかつたら二節目からついて歌つてください。」

みんなはパチパチ手を叩きました。テーモも首をまげて聞いてやろうというようにしました。楽隊がやりました。ミー口は歌いだしました。

「けさの六時ころ

ワルトラワラの

峠をわたしが

越えようとしたら

朝霧がそのときに

ちようど消えかけて



一本の栗の木は

後光をだしていた

わたしはいただきの

石にこしかけて

朝めしの堅ぱんを

かじりはじめたら

その栗の木がにわか

ゆすれだして

降りて来たのは

二足の電気栗鼠りす

わたしは急いで……」

「おいおい間違っちゃいかんよ。」山猫博士がいきなりどなりだしました。

「何だつて。」ミールはあつけにとられて云いました。

「今朝ワルトラワーラの峠に電気栗鼠など居た筈はない、それは  
いたちの間違いだらう。もつとよく考えて歌ってもらいたいね。」

「そんなことどうだっていいんだい。」ミーロは怒って壇を下りました。すると山猫博士が立ちあがりました。

「今度は我輩わがはいうたって見せよう。こら楽隊、In the good summer timeをやれ。」

楽隊の人たちは何べんもこの節をやったと見えてすぐいつしよにはじめました。山猫博士は案外うまく歌いだしました。

「つめくさの花の 咲く晩に

ポランの広場の 夏まつり

ポランの広場の 夏のまつり

酒を吞まずに 水を吞む

そんなやつらが でかけて来ると

ポランの広場も 朝になる

ポランの広場も 白ぱつくれる。」

ファゼーロは泣きだしそうになってだまつてきいていましたが、歌がすむとわたくしがつかまえるひまもなく壇にかけのぼつてしまいました。

「ぼくもうたいます。いまのふしです。」

楽隊はまたはじめました。山猫博士は、

「いや、これはめずらしいことになったぞ。」と云いながら又大きなコップで二つばかり引っかけました。

ファゼーロは力いっぱいうたいだしました。

「つめくさの花の かおる夜は

ポラーノの広場の 夏まつり

ポラーノの広場の 夏のまつり

酒くせのわるい 山猫が

黄いろのシャツで 出かけてくると

ポラーノの広場に 雨がふる

ポラーノの広場に 雨が落ちる。」

デストウパーゴがもう憤然として立ちあがりました。

「何だ失敬な、決闘をしろ、決闘を。」

わたくしも思わず立ってファゼー口をうしろにかばいました。

「馬鹿を云え、貴さまがさきに悪口を言って置いて。こんな子供に決闘だなんてことがあるもんか。おれが相手になってやろう。」

「へん、貴さまの出る幕じやない。引っこんでいろ。こいつが我輩、名誉ある県会議員を侮辱ぶじよくした。だから我輩はこいつへ決闘を申し込んだのだ。」

「いや、貴さまがおれの悪口を言ったのだ。おれはきさまに決闘を申し込むのだ、全体きさまはさつきから見ていると、さもきさま一人の野原のように威張り返っている。さあ、ピストルか刀かどっちかを撰べ。」

するとデストウパーゴはいきなり酒をがぶつと呑みました。

ああファゼーロで大丈夫だ。こいつはよほど弱いんだ。

わたくしは心のなかで、そつとわらいました。

はたしてデストウパーゴは空っぽな声でどなりだしました。

「黙れっ。きさまは決闘の法式も知らんな。」

「よし。酒を呑まなけあ物をいえないような、そんな卑怯なやつ  
の相手は子どもでたくさんだ。おいファゼーロしつかりやれ。こ  
んなやつは野原の松毛虫だ。おれがうしろで見ているから、めち  
やくちやにぶん撲なぐつてしまえ。」

「よし、おい、誰かおれの介添かいぞえ人になれ。」

そのときさつきの夏フロックが出てきました。

「まあ、まあ、あんな子供をあんたが相手になさることはありま  
せん。今夜は大切の場合なのですから、どうか。」

すると山猫博士はいきなりその男を撲りつけました。

「やかましい。そんなことはわかつている。黙って居れ。おい誰

かおれの介添をしろ。テモ。」

「はい。どうぞ、おゆるしを。あとでわたくしがよく仕置きいたします。」

「やかましい。おい、クローノ、きさまやれ。」

クローノと呼ばれた百姓らしい男が、

「さあ、おいらじゃあね。」と云つてみんなのうしろへ引つ込んでしまいました。

「臆病者、おいポーシヨ、きさまやれ。」

「おいらあともだめだよ。」

デストウパーゴはいよいよ怒つてしまいました。

「よし介添人などいらぬ。さあ仕度しろ。」

「きさまも早く仕度しろ。」わたくしはファゼーロに上着をぬがせながら云いました。

「剣でも大砲でもすきなものを持ってこいよ。」

「どっちでもきさまのすきな方にしろ。」どこにそんなものがあるんだい、と思いながらわたくしは云いました。

「よし、おい給仕、剣を二本持ってこい。」

すると給仕が待っていたように云いました。

「こんな野原で剣はございません。ナイフでいけませんか。」するとデストウパーゴは安心したようにしながら、

「よし、持ってこい。」と声だけ高く云いました。

「承知しました。」



給仕が食事につかうナイフを二本持って来て、うやうやしくデストウパーゴにわたしました。まるで芝居だとわたくしは思いました。ところがデストウパーゴはていねいにこの両方の刃をしらべているのです。それから、

「さあどっちでもいい方をとれ。」といって二本ともファゼーロに渡しました。

ファゼーロはすぐその一本をデストウパーゴの足もとに投げて返しました。デストウパーゴは拾いました。

そこでわたくしはまん中に出ました。

「いいか。決闘の法式に従うぞ。組打ちはならんぞ。一、二、三、よし。」

すると何のことはない、デストウパーゴはそのみじかいナイフを剣のように持つて一生けんめいファゼー口の胸をつきながら後退りしましたしファゼー口は短刀をもつように柄をにぎつてデストウパーゴの手首をねらいましたので、三度ばかりぐるぐるまわつてからデストウパーゴはいきなりナイフを落して左の手で右の手くびを押えてしまいました。

「おい、おい、やられたよ。誰か沃度<sup>ヨード</sup>ホルムをもっていないか。過酸化水素はないか。やられた、やられた。」

そしてべつたり椅子へ坐つてしまいました。わたくしはわらいました。

「よくいろいろの薬の名前をご存知ですな。だれか水を持ってき

てください。」

ところがその水をミローがもってきました。そして如露じよろでシャワーをかけましたのでデストウパーゴは膝から胸からずぶぬれになって立ちあがりました。

そして工合のわるいのごまかすように、

「ええと、我輩はこれで失敬する。みんな充分やつてくれ給え。」と勢よく云いながら、すばやく野原のなかへ走りました。

するとテーモも夏フロックもそのほか四五人急いであとを追いかけて行ってしまいました。行ってしまふと、にわかになんが元気よくなりました。

「やい、ファゼーロ、うまいことをやったなあ。この旦那はいつ

たい誰だい。」

「競馬場に居る人なんだよ。」

「いったい今夜はどういうんですか。」わたくしはやつとたずねました。

「いいや、山猫の野郎、来年の選挙の仕度なんですよ。ただで酒を呑ませるポラーノの広場とはうまく考えたなあ。」

「この春からかわるがわるこうやってみんなを集めて呑ませたんです。」

「その酒もなあ。」

「そいつは云うな。さあ一杯やりませんか。」

「いいえ、わたしどもは呑みません。」

「まあ、おやんなさい。」

わたくしはもうたまらなくいやになりました。

「おい、ファゼーロ行こう。帰ろう。」

わたくしはいきなり野原へ走りだしました。ファゼーロがすぐついて来ました。みんなはあとでまだがやがやがや云つていました。新らしく楽隊も鳴りました。誰かの演説する声もきこえました。わたくしたちは二人、モリーオの市の方のぼんやり明るいのを目あてにつめくさのあかりのなかを急ぎました。そのとき青く二十日の月が黒い横雲の上からしずかにのぼってきました。ふりかえってみると、もうあのはんの木もあかりも小さくなつて銀河はずうっと西へまわり、さそり座の赤い星がすっかり南へ来

ていました。

わたくしどもは間もなくこの前三人で別れたあたりへ着きました。

「きみはテーモのところへ帰るかい。」わたくしはふと気がついて云いました。

「帰るよ。姉さんが居るもの。」ファゼーロは大へんかなしそうなせまった声で云いました。

「うん。だけどいじめられるだろう。」わたくしは云いました。

「ぼくが行かなかつたら姉さんがもつといじめられるよ。」ファゼーロはどうとう泣きだしました。

「わたしもいっしょに行こうか。」

「だめだよ。」ファゼーロはまだしばらく泣いていました。

「わたしのうちへ来るかい。」

「だめだよ。」

「そんならどうするの。」

ファゼーロはしばらくだまっていたましたが、俄かに勢よくなつて云いました。

「いいよ。大丈夫だよ。テーモはぼくをそんなにいじめやしないから。」

わたくしは、それが役人をしているものなどの癖なのです、役所でのあしたの仕事などぼんやり考えながらファゼーロがそういうならよかろうと思つてしまいました。

「そんならいいだろう。何かあったらしらせにおいでよ。」

「うん、ぼくね、ねえさんのことでのみに行くかもしれない。」

「ああいいとも。」

「じゃ、さよなら。」

ファゼーロはつめくさのなかに黒い影を長く引いて南の方へ行ききました。わたくしはふりかえりふりかえり帰って来ました。

うちへはいつてみると、机の上には夕方の酒石酸のコップがそのまま置かれて電燈に光り枕時計の針は二時を指していました。

#### 四、警察署



ところがその次の次の日のひるすぎでした。わたくしが役所の机で古い帳簿から写しものをしていきますと給仕が来てわたくしの肩をつつついて、

「所長さんがすぐ来いって。」と云いました。

わたくしはすぐペンを置いてみんなの椅子の間を通り、間の扉をあけて所長室にはいりました。

すると所長は一枚の紙きれを持って扉をあける前から恐い顔つきをして、わたくしの方を見ていましたが、わたくしが前に行つてうやうや恭しく礼をすると、またじつとわたくしの様子を見てからだまってその紙切れを渡しました。見ると、

イ警第三二五六号 聴取の要有之本日午後三時本警察署人事係ま

で出頭致され度し<sup>た</sup>

イーハトーヴオ警察署

一九二七年六月廿九日

第十八等官レオーノ・キュースト殿

とあつたのです。

ああ、あのデストウパーゴのことだな、これはおもしろいと、わたくしは心のなかでわらいました。すると所長はまだわたくしの顔付きをだまってみていましたが、「心当りがあるか。」と云いました。

「はい、ございます。」わたくしはまっすぐ両手を下げて答えました。

所長は安心したようにやつと顔つきをゆるめて、ちらつと時計を見上げましたが、

「よし、すぐ行くように。」と云いました。

わたくしはまたうやうやしく礼をして室を出ました。それから席へ戻って机の上をかたづけ、そつと役所を出かけました。巨きな桜の街路樹の下をあるいて行って、警察の赤い煉瓦造りの前に立ちましたら、さすがにわたくしもすこしどきどきしました。けれども何も悪いことはないのだからと、じぶんでじぶんをはげまして勢よく玄関の正面の受付にたずねました。

「お呼びがありましたので参りましたが、レオーノ・キューストでございます。」

すると受付の巡査はだまつて帳面を五六枚繰っていました、  
「ああ失<sup>しつそう</sup>踪者の件だね、人事係のところへ、その左の方の入口か  
らはいつて待つていたまえ。」と云いました。

失踪者の件というのは何のことだろう、決闘の件とでも云うな  
らわかつているし、その決闘なら刃の円くなつた食卓ナイフでや  
つたことなのだ、デストウパーゴが血を出したかどうかともわから  
ない、まあ何かの間違いだらうと思ひながら、わたくしは室へ入  
つて行きました。そこはがらんとした、窓の七つばかりある広い  
室でしたが、その片隅みにあの山猫博士の馬車別当が、からだを  
無<sup>むやみ</sup>暗にこわばらして、じつに青ざめた変な顔をしながら腰かけて  
待つて居りました。

「やあ、じいさん、今日は、あなたも呼ばれたんですか。」わたしはそばへ行ってわらいながら挨拶あいさつしました。

するとじいさんは、こんな悪者と話し合ってはどんな眼にあうかわからないというように、うろろうどこか遁げ口でもさがすように立ちあがって、またべったり坐りました。

「あなたのご主人はいらっしゃらないのですか。」わたしはまたたねました。

「いらつしやらないともさ。」じいさんはやつと云いましたが、それからがたがたふるえました。

「いったいどうしたんですか。」わたしはまだわらってききました。

「いま調べられてるんだよ。」

「誰が。」わたくしはびっくりしてたずねました。

「ロザローがさ。」

「ロザロー、どうして？」もうわたくしはすっかり本気になってしまいました。

「ファゼーロが居なくなつたからさ。」

「ファゼーロ？」思わずわたくしは高く叫びました。

ああ、あの晩ファゼーロが帰る途中で何かあつたのだな、……。

「話しすることはならん。」

いきなり奥の扉が、がたとあきました。

「召喚しょうかん人はお互話しすることはならん。おい、おまえはこつ

ちへはいつて居ろ。」

じいさんは呼ばれてよろよろ立って次の室へ行きました。そう云われて見ると、なるほど次の室ではロザーロが誰かに調べられているらしく、さつきからしずかに何か繰り返し繰り返して居るような気もしました。わたくしはまるで胸が迫ってしまいました。

ファゼーロが居ない、ファゼーロが居ない、あの青い半分の月のあかりのなかで争って勝ったあとのあの何とも云われないきびしい気持をいだきながら、ファゼーロがつめくさのあおじろいあかりの上に影を長く長く引いて、しよんぼりと帰って行った、そこには麻の夏外套のえりを立てたデストウパーゴが三四人の手下

を連れて待ち伏せしている、ファゼーロがそれを見て立ちどまると向うは笑いながらしずかにそばへ追つて来る、いきなり一人がファゼーロを撲りつける、みんなたかつて来て、むだに手をふりまわすファゼーロをふんだりけったりする、ファゼーロは動かない、デストウパーゴがそれをまためちやくちやにふみつける、ええ、もう仕方ない持つてけ持つてけとデストウパーゴが云う、みんなはそれを乾溜工場のかまの中に入れる、わたくしはひとりでかんがえてぞつとして眼をひらきました。

（ああ、あのとかなぜわたくしはそのままうちへ帰つてねむつたらう、なぜそんなわたくしが立つても居てもいられないはずの時刻に、わけもわからない眠りかたなどしていたらう。それにあの



やさしいうつくしいロザーロがいま隣りの室でおどされたり鎌かまを  
かけられたりしているのだ。」

わたくしはたまらなくなつてその室のなかをぐるぐる何べんも  
あるきました。窓の外の桜の木の向うをいろいろの人が行つたり  
来たりしました。わたくしはその一人一人がデストウパーゴかフ  
アゼーロのような気がしてたまりませんでした。鳥打帽子を深く  
かぶつた少年が通るとフアゼーロが遁げてここをそつと通るのか  
と思ひ、肥つた人を見るとデストウパーゴがわざとそんな形にば  
けて、様子をさぐつて思ひました。突然わたくしは頭  
がしいんとなつてしまいました。隣りの室でかすかなすすり泣き  
の聲がして、それからそれは何かだつと叫びながらおどかすよ

うに足をどんとふみつけているのです。わたくしはあぶなく扉をあけて飛び込もうとしました。するとまたしばらくしづかになつていましたが間もなく扉のどつてが力なくがちつとまわつて、ロザーロが眼を大きくあいてよろめくようにでてきました。

わたくしは何と聞いていいかわからなくてどぎまぎしてしまいました。するとロザーロがだまつてしづかにおじぎをして私の前を通り抜けて外へ出て行きました。気がついて見るとロザーロのあとからさっきの警部か巡査からしい人が扉から顔を出して出て行くのを見ていたのです。わたくしがそつちを見ますと、その顔はひっこんで扉はしまつてしまいました。中ではこんどは山猫博士の馬車別当が何か訊かれていますようすで、たびたび、何か高声

でどなりつけるたびに馬車別当のおろおろした声がきこえていました。わたくしはその間にすっかり考えをまとめようと思いましたが、何もかもごちやごちやになってどうしてもできませんでした。とにかくすっかり打ち明けて係りへ話すのがいちばんだと考えて、もうじつとすわって落ち着いて居りました。すると間もなくさっきの扉が、がじゃつとあいて馬車別当がまつ青になってよろしなから出てきました。

「第十八等官、レオーノ・キュースト氏はあなたですか。」さっきの人がまた顔を出して云いました。

「そうです。」

「では、こつちへ。」

わたくしははいつて行きました。そこには、も一人正面の卓に書類を載せて鬚ひげの立派な一人の警部らしい人が、たつたいまあくびをしたところだというふうに目をぱちぱちしながら、こつちを見ていました。

「そこへお掛けなさい。」

わたくしは警部の前に会釈して坐りました。

「君がレオーノ・キュースト君か。」警部は云いました。

「そうです。」

「職業、官吏、位階十八等官、年齢、本籍、現住、この通りかね。」警部はわたしの名やいろいろ書いた書類を示しました。

「そうです。」

「では訊ねるが、君はテーモ氏の農夫ファゼーロをどこへかくしたか。」

「農夫のファゼーロ？」わたくしは首をひねりました。

「農夫だ。十六歳以上は子どもでも農夫だ。」警部は面倒くさそうに云いました。

「君はファゼーロをどこかへかくしているだろう。」

「いいえ、わたくしは一昨夜競馬場の西で別れたきりです。」

「偽うそを云うとそれも罪に問うぞ。」

「いいえ。そのときは二十日の月も出ていましたし野原はつめくさのあかりでいつぱいでした。」

「そんなことが証しょうこ拠こになるか。そんなことまでおれたちは書い

ていられんのだ。」

「偽だとお考えになるならどこなりとお探しくださればわかります。」

「さがさがさんはこっちの考えだ。お前がかくしたろう。」

「知りません。」

「起訴するぞ。」

「どうでも。」二人は顔を見合しました。

「では訊ねるが君はどういうことでファゼーロと知り合いになったか。」

「ファゼーロがわたくしの遁げた山羊をつかまえてくれましたので。」

「うん。それはいつ、どこでだ。」

「五月のしまいの日曜、二十七日でしたかな。」

「うん。二十七日。どこでだ。」

「あれは何という道路ですか。教会の横から、村へ出る道路を一キロばかり行った辺です。」

「うん。おまえは二十七日の晩フアゼーロと連れだつて村の園遊会へちんにゆう 入いしたなあ。」

「闖入というわけではありませんでした。明るくていろいろの音がしますので行つて見たのです。」

「それからどうした。」

「それからわたくしどもが酒を呑まんと云いますとテーモが怒つ

たのです。」

「テームはお前とはいつから知り合いか。」

「ファゼーロと知り合いになったときです。そのときテームはファゼーロが仕事に行く時間をわたくしが邪魔したといつて革むちをわたくしの顔の前で鳴らしました。」

「それだけか。」

「はい。」

「園遊会でそれからどういうことになったか。」

わたくしはそこであのポラーノの広場での出来事を全部話しました。一人はそれをどんどん書きとりました。警部が云いました。「きみはファゼーロの居ないことをさつきまで知らなかったか。」



「はい。」

「何か証拠を挙げられるか。」

「はい、ええ、昨日と今日役所での仕事をごらん下さればわかります。わたくしはあれですっかりかたが着いたと思つてせいせいして働いていたのであります。」

「それも証拠にはならん。おい、君、白つぱくれるのもいい加減にしたまえ。テーモ氏から搜索願が出ているのだ。いま君がかりかを云えば内分で済むのだ。でなけあ、きみの為にならんぜ。」

「どうも全く知らないのです。まあ、あなたがたもご商売でしょうが、わたくしの声や顔付きをよくごらんください。これでおわかりにならないのですか。」わたくしは少ししやくくにさわつて一息

に云いました。

すると二人はまた顔を見合せました。ええもうなるようになれとわたくしはまた云いました。

「なぜわたくしより前にデストウパーゴを呼び出してくださいさらんのです。誰が考えてもファゼーロの居ないのはデストウパーゴのしわざです。まさか殺しはしますまいが。」

「デストウパーゴ氏は居らん。」

わたくしはどきつとしました。ああファゼーロは本気かあるいは間ちがつて殺されたのかもしれない。警部が云いました。

「お前の申し立てはいろいろの点でテーモ氏の申し立てとちがっている。しかしわれわれはそれは当然だろうと考える。いま調書

を読むから君の云ったところとちがった所がないかよくききたまえ。」一人は読みはじめました。

「ちがいはありません。」私はファゼーロのことを考えながら上の空で答えました。

「ここへ署名したまえ。」

わたくしは書類のはじめへ書きました。もうどうしても心配で心配でたまらなくなつたのです。

「では帰つてよろしい。明日また呼ぶから。」警部は云いました。わたくしはたまらなくなりました。

「ファゼーロはどうしたんです。なぜデストウパーゴをつかまえるのです。」

「それを君が云うことはならん。」

「だってファゼーロはどうしたんです。」

「そんなに心配なら君もさがしたまえ。さあ帰り給え。」

二人はもう疲れて早くやめたいという風でした。わたくしはもうあかりのついていた警察署を夢中で飛びだしました。すると出口の桜の幹に、その青い夕方もやのなかに、ロザーロがしよんぼりよりかかって、かなしそうに遠いそらを見ていました。わたくしは思わずかけよりました。

「あなたはロザーロさんですね。わたくしはどこへさがしに行つたらいいでしょう。」

ロザーロが下を見ながら云いました。

「きつと遠くでございますわ。もし生きていれば。」

「わたくしがいけなかつたんです。けれどもきつとさがしますか  
ら。」

「ええ。」

「デストウパーゴはいないんですか。」

「いないんです。」

「馬車別当は？」

「見ませんでした。」

「あなたのご主人は知っていないんですか。」

「ええ。」

「搜索願をわざと出したのでしよう。」

「いいえ。警察からも人が来てしらべたのです。」

「あなたはこれから主人のところへお帰りになるんですか。」

「ええ。」

「そこまでご一緒いたしましょう。」

わたくしどもはあるきだしました。わたくしはいろいろ話しかけて見ましたが、ロザーロはどうしてもかなしそうで一言か二言しか返事しませんので、わたくしはどうしてももつと立ち入ってファゼーロと二人のことに立ち入ることができませんでした。そしてこの前山羊をつかまえた所まで来ますと、ロザーロは、「もうじきですから。」と云ってじぶんからおじぎをして行ってしまうました。

わたくしはさびしさや心配で胸がいっぱいでした。そしてその晩から毎晩毎晩野原にファゼーロをさがしに出ました。日曜日にはひるも出ました。ことにこの前ファゼーロと別れた辺からテーモの家までの間に何か落ちてないかと思つてさがしたり、つめくさの花にデストウパーゴやファゼーロのあしあとがついていないかと思つて見てまわつたり、デストウパーゴの家から何か物音がきこえないかと思つて幾晩も幾晩もそのまわりをあるいたりしました。

前の二本の樺の木のあたりからポラーノの広場へも何べんも行ききました。そのうちにつめくさの花はだんだん枯れて茶いろになり、ポラーノの広場のはんの木には、ちぎれて色のさめたモール

が幾本かかかっているだけ、ミーロにさえも会いませんでした。警察からはあと呼び出しがありませんでしたので、こつちから出て行ってどうなったかきいたりしましたが警察ではファゼーロもデストウパーゴも、まだ手がかりはないが心配もなからうというようなことばかり云うのでした。そしてわたくしも、どういうわけか、なれたのですか、つかれたのですか、ファゼーロはファゼーロで、ちやんとどこかにいるというような気がしてきたのです。

##### 五、センドード市の毒蛾

そしてだんだん暑くなってきました。役所では窓に黄いろな日ひ



覆おおいもできませんでしたし隣りの所長の室には電気会社から寄贈になつた直径七デシもある大きな扇風機も据すえつけられました。あまり暑い日の午後などは所長が自分で立って間の扉をあけて、

「さあ諸君、少し風にあたりたまえ。」なんて云つたものです。

すると大扇風機から風がどうどうやって来ました。尤も私の席もつと

はその風の通り路からすこし外れていましたから格別涼しかったわけでもありませんでしたが、それでも向うの書類やテーブルかけが、ぱたぱた云っているのを見るのは実際愉快なことでした。それでもそんな仕事のあいまに、ふつとファゼー口のことを思いだすと、胸がどかかと熱くなつてもうどうしたらいいかわからなくなるのでした。とにかくその七月いっぱいには私のした仕事は、

一、北極熊剥製方はくせいをテラキ標本製作所に照会の件

一、ヤークシヤ山頂火山弾運搬費用見積みつもりの件

一、植物標本褪たいしょく色調査の件

一、新番号札二千三百枚調製の件

などでした。

そして八月に入りました。その八月二日の午すぎ、わたくしが支那漢時代の石に刻んだ画の説明をうつらうつら写していましたが、給仕がうしろからいきなりわたくしの首すじを突っついて、

「所長さんが来いって。」といいました。

わたくしはすこしむつとしてふり返りましたら給仕はまた威張って云いました。

「所長さんがすぐ来いって。」

わたくしは返事もしないでだまってみんなの椅子のうしろを通り、例の扉をあけて恭しくはいって行きました。

所長は肥った白い手首に をもたせて扇風機にあたりながら新聞を見ていましたが、わたくしが行くとだるそうにちよつと眼をあげて、それから机の上の紙挟みから一枚の命令書をわたくしによこしました。それには、

「海岸鳥類の卵採集の為に八月三日より二十八日間イーハトーヴオ海岸地方に出張を命ず。」

と書いてありました。わたくしはまるでほくほくしてしまいました。

あのイーハトーヴオの岩礁の多い奇麗きれいな海岸へ行つて今ごろありもしない卵をさがせというのはこれは慰勞いろらう休暇のつもりなのだ。それほどわたくしが所長にもみんなにも働いていると思われていたのか、ありがたいありがたいと心の中で雀じゃくやく躍やくしました。すると所長は私の顔は少しも見ないで、やっぱり新聞を見ながら、「会計へまわつて見みつもり積み旅費を受けとるように。」と一言だけ云いました。

わたくしは町ていねい疇いに礼をして室を出ました。それからその辞令をみんなに一人ずつ見せて挨拶してあるき、おしまいに会計に行きましたら、会計の老人はちよつと渋い顔付きはしていましたが、だまつてわたくしの印を受け取つて大きな紙幣を八枚も渡してく

れました。ほかに役所の大きな写真器械や双眼鏡も借りました。うちへ帰ると、わたくしは持っていたレコードをみんな町の古時計屋へ売ってしまいました。そして大きなヘリのついたパナマの帽子と卵いろのリンネルの服を買いました。

次の朝わたくしは番小屋にすっかりかぎをおろし、一番の汽車でイーハトーヴォ海岸の一番北のサーモの町に立ちました。その六十里の海岸を町から町へ、岬みさきから岬へ、岩がんし礁しょうから岩礁へ、海かいそう藻を押葉にしたり、岩石の標本をとったり、古い洞穴や模型的な地形を写真やスケッチにとったり、そしてそれを次々に荷造りして役所へ送りながら、二十幾日の間にだんだん南へ移って行きました。海岸の人たちはわたくしのような下給の官吏でも大へ

ん珍らしがって、どこへ行つても歓迎してくれました。沖の岩礁へ渡ろうとすると、みんなは船に赤や黄の旗を立てて十六人もかかつて櫓ろをそろえて漕いでくれました。夜にはわたくしの泊った宿の前でかがりをたいて、いろいろな踊りを見せたりしてくれました。たびたびわたくしはもうこれで死んでいいと思いました。けれどもファゼーロ、あの暑い野原のまんなかでいまも毎日ほたらいているうつくしいロザーロ、そう考えて見るといまわたくしの眼のまえで一日一ぱいはたらいてつかれたからだを、踊ったりうたったりしている娘たちや若者たち、わたくしは何べんも強く頭をふつて、さあ、われわれはやらなければならぬぞ、しつかりやるんだぞ、みんなのために、とひとりどころに誓いました。

そして八月三十日の午ごろ、わたくしは小さな汽船でとなりの県のシオーモの港に着き、そこから汽車でセnderダードの市に行きました。三十一日わたくしはその理科大学の標本をも見せて貰うように途中から手紙をだしてあつたのです。わたくしが写真器と背はいのう囊をたくさんもってセnderダードの停車場に下りたのは、ちようど灯がやつとついた所でした。わたくしは大学のすぐ近くのホテルからの客を迎える自動車へほかの五六人といっしよに乗りました。採つて来たたくさんの標本をもつてその巨きな建物の間を自動車で走るとき、わたくしはまるで凱がいせん旋の將軍のような気がしました。ところがホテルへ着いて見ると、この暑いのに窓がすっかり閉めてあるのです。室へ通されてみると仲々むし暑いので

で、わたくしは給仕に、

「おい、どうしたんだ。窓をあけたらいいじやないか。」と云いました。

すると給仕はてかてかの髪をちよつと撫でて、

「はい、誠にお気の毒でございりますが、当地方には、毒蛾どくががひどく発生して居りまして、夕刻からは窓をあけられませんのでございます。只今、扇風機を運んで参ります。」と云つたのでした。

なるほど、そう云つて出て行く給仕を見ますと、首にまるで石の環をはめたような厚い繃帯をして、顔もだいぶはれていましたから、きつと、その毒蛾に噛まれたんだと、私は思いました。ところが、間もなく隣の室で、給仕が客と何か云い争っているよ



うでした。それが仲々長いし烈しいのです。私は暑いやら疲れたやら、すっかりむしやくしやしてしまいましたので、今のうち一寸床屋へでも行つて来ようと思つて室を出ました。そして隣りの室の前を通りかかりましたら、扉が開け放してあつて、さっきの給仕がひどく悄気て頭を垂れて立っていました。向うには、髪もひげもまるで灰いろの、肥ったふくろうのようなおじいさんが、安楽椅子にぐったり腰かけて、扇風機にぶうぶう吹かれながら、「給仕をやっていないながら、一通りのホテルの作法も知らんのか。」と頬ほおをふくらして給仕を叱りつけていました。

私は、ははあ扇風機のことだなと思ひながら、苦笑いをしてそこを通り過ぎようとしみますと、給仕がちよつとこつちを向いて、

いかにも申し訳ないというように眼をつぶって見せました。私はそれですっかり気分がよくなったのです。そして、どしどし階段を踏んで、通りに下りました。

なるほど、毒蛾のことがわかって町をあるくと、さつき停車場からホテルへ来る途中、いろいろ変に見えたけしきも、すっきりもつともと思われたのです。人道にはたくさんたき火のあとがありましたし、みんなは繃帯をしたり白いきれで顔を擦ったりしながら歩いていました。また並木のやなぎにいちいち石油ランプがぶらさがっていたのです。私は一軒の床屋に入りました。それは仲々大きな床屋でした。向側の鏡が、九枚も上手に継いであつて、店が丁度二倍の広さに見えるようになって居り、糸杉とがやこめ梅の

植木鉢がぞろつとならび、親方らしい隅のところで指図をしている人のほかに職人がみなで六人もいたのです。すぐ上の壁に大きなくががかかって、そこにそのうちの四人の名前が理髪アーティストとして立派にならび、二人は助手として書かれていました。

「お髪はぐしこの通りの型でよろしゆうございますか。」私が鏡の前の白いきれをかけた上等の椅子に坐つたとき、そのうちの一人が私にたずねました。

「ええ。」私はもう明日は帰るイーハトーヴオの野原のことを考えながらぼんやり返事をしました。

するとその人は向うで手のあいているもう二人の人たちを指で招きながら云いました。

「どうだろう。お客さまはこの通りの型でいいと仰っしゃるが、君たちの意見はどうだい。」

二人は私のうしろに来て、しばらくじつと鏡にうつる私の顔を見ていましたが、そのうち一人のアーティストが、白服の腕を組んで答えました。

「さあ、どうかね、お客さまのお おとな が白くて、それに円くて、大へん温和おとなしくいらつしやるんだから、やはりオールバックよりはネオグリーンの方がいいじゃないかなあ。」

「うん。僕もそう思うね。」も一人も同意しました。私の係りのアーティストが、おれもそうおもっていたというようにうなずいて、私に云いました。

「いかがでございます、ただいまのお髪ぐしの型よりは、ネオグリークの方がお顔と調和いたしますようでございませうが。」

「そうですね、じゃそう願いまししょうか。」私も丁寧に云いました。なぜならこの人たちはみんな立派な芸術家だとおもったからです。

さて、私の頭はずんずん奇麗になり、疲れも大へん直りました。これなら、今夜よく寝やすんで、あしたは大学のあの地下になっている標本室で、向うの助手といちにち暮しても大丈夫だと思つて、気持ちよく青い植木鉢や、アーティストの白い指の動くのや、チヤキチヤキ鳴る鋏はさみの影をながめて居りました。

すると俄にわかに私の隣りの人が、

「あ、いけない、いけない、押えてくれたまえ。畜生、畜生。」とひどく高い声で叫んだのです。

びっくりして私はそつちを見ました。アーティストたちもみな馳<sup>は</sup>せ集ったのです。その叫んだ人は、それこそはひげを片つ方だけ剃ったままで大へん瘠<sup>や</sup>せては居りましたが、しかしたしかにそれはデストウパーゴです。わたくしは占<sup>し</sup>めたとおもいました。デストウパーゴはわたくしなぞ気がつかずに、まだ怖ろしそうに顔をゆがめていました。

「どこへさわりましたのですか。」

さっきの親方のアーティストが麻のモーニングを着て、大きなフラスコを手にしてみんなを押し分けて立っていました。そのう

ちに二三人のアーティストたちは、押虫網でその小さな黄色な毒蛾をつかまえてしまいました。

「ここだよ、ここだよ。早く。」と云いながら、デストウパーゴは左の眼の下を指しました。

親方のアーティストは、大急ぎで、フラスコの中の水を綿にしみつけてその眼の下をこすりました。

「何だいこの薬は。」デストウパーゴが叫びました。

「アンモニア二%液。」と親方が落ち着いて答えました。

「アンモニアは効かないって、今朝の新聞にあつたじゃないか。」デストウパーゴは椅子から立ちあがりました。デストウパーゴは桃いろのシャツを着ていました。

「どの新聞でご覧です。」親方は一層落ちついて答えました。

「セクタート日日新聞だ。」

「それは間違いです。アンモニアの効くことは県の衛生課長も声明しています。」

「あてにならない。」

「そうですか。とにかく、だいぶ腫<sup>は</sup>れて参ったようです。」

親方のアーティストは、少ししやくにさわつたと見えて、ピイツとうしろを向いて、フラスコを持ったまま向うへ行つてしまいました。デストウパーゴは、ぶんぶん怒りだしました。

「失敬じゃないか、あしたは僕は陸軍の獣医官たちと大事な交際があるんだぞ。こんなことになつちや、まるで向うの感情を害す



るばかりだ。きさまの店を訴えるぞ。」と云いながら、ずんずん赤くはれて行く頬を鏡で見っていました。

親方も、むかつ腹を立てて云いました。

「なあに毒蛾なんか、市中到る処に居るんだ。町をあるいてさわられたら市長でも訴えたらよかろうさ。」

デストウパーゴは、渋々、又椅子に坐つて、

「おい、早くあとをやつてしまつて呉れ。早く。」と云いました。そして、しきりに変な形になつて行く顔を気にしながら、残りの半分のひげを剃らせていました。

わたくしも急ぎました。けれどもたしかにわたくしの方が早く済むのです。それでも向うがさきに済んだら、こつちもすぐ立と

うと思つてそつと財布をさぐつて、大きな銀貨を一枚もつて握つていました。ところがどういふわけか、私より私のアーティストがもつと急いで居りました。そしてしきりに時計を見ました。

まるで私の顔などは、三十五秒ぐらいで剃つてしまつたのです。「さあお洗いいたしましょう。」

私はデストウパーゴに知れないように、手で顔をかくしながら大理石の洗面器の前に立ちました。

アーティストは、つめたい水でシャアシャアと私の頭を洗い時々指で顔も拭ぬぐいました。

それから、私は、自分で勝手に顔を洗いました。そして、も一度椅子にこしかけたのです。

その時親方が、

「さあもう一分だぞ。電気のあるうちに大事なところは済ましちまえ。それからアセチレンの仕度はいいか。」

「すっかり出来ています。」 小さな白い服の子供が云いました。

「持つて来い。持つて来い。あかりが消えてからじゃ遅いや。」 親方が云いました。

そこでその子供の助手が、アセチレン燈を四つ運び出して、鏡の前にならば、水を入れて火をつけました。烈しく鳴って、アセチレンは燃えはじめたのです。その時です。あちこちの工場の笛は一斉に鳴り、子供らは叫び、教会やお寺の鐘まで鳴り出して、それから電燈がすっと消えたのです。電燈のかわりのアセチレン

で、あたりがすっかり青く変りました。

それから私は、鏡に映っている海の中のような、青い室の黒く透明なガラス戸の向うで、赤い昔の印度をしの偲しのばせるような火が燃もれているのを見ました。一人のアーティストが、そこでしきりに薪まきを入れていたのです。

「今夜は、毒蛾も全滅だな。」誰か向うで云いました。

「さあどうかねえ。」私のとこのアーティストは、私の頭に、金口の瓶から香水をかけながら答えました。

それからアーティストは、私の顔をも一度よく拭ぬって、それから戸口の方をふり向いて、

「ちよつと見て呉れ。」と云いました。アーティストたちは、あ

るいは戸口に立ち、あるいはたき火のそばまで行って、外の景色をながめていましたが、この時大急ぎでみんな私のうしろに集まりました。そして鏡の中の私の顔を、それはそれは真面目な風で検べてから、

「いいようだね。」と云いました。

私はそこで椅子から立ちました。しっかり握っていて温くなつた銀貨を一枚払いました。そしてその大きなガラスの戸口を出て通りに立ちました。デストウパーゴのあとをつけようとおもつたのです。

そこへ立つて私は、全く変な気がして、胸の躍るのをやめることができませんでした。それはあのセnderの市の大きな西洋

造りの並んだ通りに、電気が一つもなく、並木のやなぎには、黄いろの大きなランプがつるされ、みちにはまつ赤な火がならび、そのけむりはやさしい深い夜の空にのぼって、カシオピアもぐらぐらゆすれ、琴座も朧おぼろにまたいたのです。どうしてもこれは遙かの南国の夏の夜の景色のように思われたのです。私は、店のなにかのぞきながら待っていました。いろいろな羽虫が本当にその火の中に飛んで行くのも私は見ました。向うでもこっちでも繻帯をしたり、きれを顔にあてたりしながら、まちの人たちが火をたいていました。

そのうちに、私は向うの方から、高い鋭い、そして少し変な力のある声が、私の方にやって来るのを聞きました。だんだん近く

なりますと、それは頑がんじょう丈じょう。そんな変に小さな腰の曲ったおじいさんで、一枚の板きれの上に四本の鯨油げいゆ蠟燭ろうそくをともしたのを両手に捧げてしきりに斯こう叫んで来るのでした。

「家の中の燈火を消せい。電燈を消してもほかのあかりを点けちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。」

あかりをつけている家があると、そのおじいさんはいちいちその戸口に立って叫ぶのでした。

「家の中のあかりを消せい。電燈を消してもほかのあかりをつけちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。」

その声はガラんとした通りに何べんも反響してそれから闇に消えました。

この人はよほどみんなに敬われているようでした。どの人もどの人もみんな丁寧におじぎをしました。おじいさんはいいよいよ声をふりしぼって叫んで行くのでした。

「家のなかのあかりを消せい。電燈を消してもほかのあかりをつけちやなんにもならん。家の中のあかりを消せい。いや、今晚は」。

叫びながら右左の人に挨拶を返して行くのでした。

「あの人は何ですか。」私は火にあたっているアーティストにたずねました。

「撃劍げっけんの先生です。」

ところがその撃劍の先生はつかつかと歩いて来ました。



「うちの中のあかりを消せい、電燈を消してもべつのあかりをつ  
けちやなんにもならん。はやく消せい。おや、今晚は。なるほど、  
こちらの商売では仕方ないかね。」

「ええ、先生、今晚は、ご苦労さまでございます。」

親方ができてきて挨拶しました。

「いや今晚は、どうもひどい暑気ですね。」

「へい、全く、虫でしめっ切りですからやりきれませんや。」

「そうねえ、いや、さよなら。」撃剣の先生はまただんだん向う  
へ叫んで行きました。

この声がだんだん遠くなつて、どこかの町の角でもまがつたら  
しいとき、この青い海の中のような床屋の店のなかから、とうと

うデストウパーゴが出て来てしばらく往来を見まわしてから、すたすた南の方へあるきだしました。わたくしは後向きになって火の中へ落ちる蛾を見ているふりをしていましたが、すぐあとをつけました。デストウパーゴは毒蛾にさわられたためにたいへん落ち着かないようすでした。それにどこかよほどしよげていました。わたくしはあとをつけながら、なんだかかあいそうな気もちになりました。もちろんひとりもデストウパーゴに挨拶するものもありませんでしたし、またデストウパーゴはなるべくみんなに眼のつかないように車道との堺の並木のしたの陰影になったところをあるいているのでした。

どうもデストウパーゴが大びらに陸軍の獣医たちなどと交際す

るなんて偽うそらしいとわたくしは思いました。とうとうデストウパーゴは立ちどまって、しばらくあちこち見まわしてから、大通りから小さな小路にはいりました。わたくしは知らないふりしてぐんぐん歩いて行きました。その小路をはいるとまもなく、一つの前庭のついた小さな門をデストウパーゴははいつて行きました。わたくしはすっかり事情を探ってからデストウパーゴに会おうか、警察へ行って、イーハトーヴオでさがしているデストウパーゴだと云って押えてしまってもらおうかと、そのときまで考えていましたが、いまデストウパーゴの家のなかへはいるのを見るときも前後を忘れて走り寄りました。

「デストウパーゴさん。しばらくでしたな。」

デストウパーゴはぎくつとして棒立ちになりましたが、わたくしを見ると遁げもしないでしょんぼりそこへ立ってしまいました。「ファゼーロをたずねてまいったのですが、どうかお渡しをねがいます。」

デストウパーゴははげしく両手をふりました。

「それは誤解です、誤解です。あの子どもは、わたくしは知りません。」

「いったいそんならあなたは、なぜこんなところへかくれたのですか。」

デストウパーゴはまっ青になりました。

「イーハトーヴオの警察ではファゼーロといっしょにあなたをさ

がしているのです。もうすっかり手配がついています。今夜はどうなつてもあなたは捕まります。ファゼーロはどこにいるのです。」「わたくしは思わず、うそをついてしまいました。

デストウパーゴは、毒蛾のためにふくれておかしな格好になつた顔でななめにわたくしを見ながら、ぶるぶるふるえて、まるで聞きとれないくらい早口に云いました。

「そんな筈はない、そんな筈はない。名誉にかけて、紳士の名誉にかけて。」

「なぜそんならあなたはこんなところへかくれたのです。」「デストウパーゴはようやくふるえるのをやめて、しばらく考えていましたが、ようやく少しゆっくり云いました。

「わたくしは警察からは召喚しょうかんされただけで、それは旅行届を出して代人を出してある筈です。それに就ては署長に充分諒解を得てあります。警察では、わたくしに何の嫌疑もかけていない筈です。」

「それならなぜ旅行届を出したりして遁げたのです。」  
デストウパーゴはやつと落ち着きました。

「いや、おはいりください。詳しくお話しましょう。」  
デストウパーゴはさきに立って小さな玄関の戸を押ししました。するとさつきから内側で立って見ていたと見えて一人のおばあさんが出迎えました。

「お茶をあげてくれ。」

デストウパーゴはすぐ右側の室へはいって行きました。わたくしはもう多分大丈夫だけれども遁げるといけないと思つて戸口に立っていました。デストウパーゴは何か瓶をかちかち鳴らしてから白いきれで顔を押えながら出て来ました。

「さあ、どうぞこちらへ。」

わたくしは応接室に通されました。デストウパーゴはようやく落ち着きました。

「わたくしがここへ人を避けて来ているのは全くちがった事情です。じつはあなたもご承知でしょうが、あの林の中でわたくしが社長になって木材乾溜の会社をたてたのです。ところがそれがこの頃の薬品の価格の変動でだんだん欠損になって、どうにもか

たなくなつたのです。わたくしはいろいろやってみましたがどうしてもいけなかつたのです。もちろんあの事業にはわたくしの全財産も賭してあります。すると重役会で、ある重役がそれをそのまま醸造所にしようということを発議しました。そこでわたくしどもも賛成して試験的にごくわずか造つて見たのですが、それを税務署へ届け出なかつたのです。ところがそれをだしにして、わたくしのある部下のものがわたくしを脅迫しました。あの晩はじつに六カしい場合でした。あすこに来ていたのはみんな株主でした。わざとあすこをえらんだのです。ところが株主の反感は非常だつたのです。わたくしももうやけくそになつて、ああいう風に酔っていたのです。そこへあなたが出て来たのですからなあ。」



わたくしははじめてあの頃のことをはつきりして来ました。それといっしょに眼の前にいるデストウパーゴがかあいそうにもなりました。

「いや、わかりました。けれども、ああ、ファゼーロはどうしたろうなあ。」

デストウパーゴが云いました。

「わたくしはあの子どもを憎んで居りません。わたくしに前のよくない条件があれば世話して学校にさえ入れたいのです。けれどもあの子どもはきつとどこかで何かしていますぞ。警察でもそう見えます。」

わたくしはいきなり立ってデストウパーゴに別れを告げました。

「ではわたくしは帰ります。あなたはここをどうかお立ち退きください。わたくしは帰つてこの事情を云わないわけにも参りませんから。」

デストウパーゴはしよんぼりとして云いました。

「いまわたくしは全く収入のみちもないのです。どうか諒解してください。」

わたくしは礼をしました。

「ロザークは変りありませんか。」デストウパーゴが大へん早口に云いました。

「ええ、働いているようです。」わたくしもなぜか、ふだんとちがった声で云いました。

## 六、風と草穂

九月一日の朝わたくしは、旅程表やいろいろな報告を持って、きまった時間に役所に出ました。わたくしはみんなにも挨拶して廻り、所長が出て来るや否や、その扉をノックしてはいつて行きしました。

「あ帰ったかね。どうだった。」所長は左手ではずれたカラーのぼたんをはめながら云いました。

「はい、お陰で昨晩戻って参りました。これは報告でございませう。集めた標本類は整理いたしましたしてから目録をつくって後ほど持つ

て参ります。」

「うん、そう急がないでもよろしい。」所長はカラーをはめてしまつてしやんとなりました。

わたくしは礼をして室を出ました。そしてその日は一日、来ていた荷物をほどこいたり机の上にたまつていた書類を整理したりしているうちに、いつか夕方になつてしまいました。わたくしもみんなのあとから役所を出て、いままでの通り公衆食堂で食事をして競馬場へ帰つて来ました。するとやっぱりよほど疲れていたと見えて、ちよつと椅子へかけたと思つたら、いつかもうとろとろ睡つてしまつていました。その甘つたるい夕方の夢のなかで、わたくしはまだあの茶いろななめらかな昆布の干された、イーハト

ーヴオの岩礁の間を小舟に乗って漕ぎまわっていました。俄かに舟がぐらぐらゆれ、何でも恐ろしくむかし風の竜が出てきて、わたくしははねとばされて岩に投げつけられたと思つて眼をさしました。誰かわたくしをゆすぶっていたのです。

わたくしは何べんも瞳を定めてその顔を見ました。それはファゼーロでした。

「あつ、どうしたんだ、きみは、ずうつと前から居たのかい。」  
わたくしはびっくりして云いました。

「ぼくはね、八月の十日に帰つてきたよ。おまえはいままで居なかつたじゃないか。」

「居なかつたさ。海岸へ出張していたんだ。」

「今夜ね、ぼくらの工場へ来ておくれ。」

「きみらの工場？　何がどうしたんだ。全体きみはどこへ行つてたんだ。」

「ぼくはねえ、センドードのまちの革を染める工場へはいつていたよ。」

「センドード。どうしてあんなとこまで行つたんだ。そして今夜またぼくにセンドードへ行けというのかい。」

「そうじゃないよ。」

「ではどうなんだ。第一どうしてあんなとこまで行つたんだ。」

「ぼく、どうしても、うちへはいれなかつたんだ。そしてうちを通り越してもっと歩いて行つた。すると夜が明けた。ぼくが困つ

て坐っていると革をかう人が通つてその車にぼくをのせてたべものをくれた。それからぼくはだんだん仕事も手伝つてとうとうセンドードへ行つたんだ。」

「そうか。ほんとうにそれはよかつたなあ。ぼくはまたきみがあの醋酸さくさん工場の釜の中へでも入れられて蒸し焼きにされたかと思つたんだ。」

「ぼくはねえ、あつちで技師の助手をしたんだ。するとその人が何でも教えてくれた。薬もみんな教えてくれた。ぼくはもう革のことなら、なめすことでも色を着けることでもなんでもできるよ。」

「そしてどうして帰つてきた。」

「警察から探されたんだよ。けれどもそんなに叱られなかった。」

「きみの主人は何と云った。」

「もうどこへ行ってもいいから勝手にしろって。」

「そしてどうするの。」

「年よりたちがねえ、ムラードの森の工場に居て、ぼくに革の仕事をしろというんだ。」

「できるかい。」

「できるさ。それにミークはハムを拵こしらえられるからな。みんなでやるんだよ。」

「姉さんは？」

「姉さんも工場へ来るよ。」



「そうかねえ。」

「さあ行こう、今夜も確か来ているから。」

わたくしは俄かに疲れを忘れて立ちあがりました。

「じや行こう。だけど遠いかい。」

「この前のポラーノの広場のちよつと向うさ。」

「少し遠いねえ。けれど行こう。」わたくしはすばやく旅行のときのままのなりをして、いっしょにうちを出ました。フアゼー口はまた走りだしました。

雲が黄ばんでけわしくひかりながら南から北へぐんぐん飛んで居りました。けれども野原はひっそりとして風もなく、ただいろいろの草が高い穂を出したり変にもつれたりしているばかり、夏

のつめくさの花はみんな鳶とびいろに枯れてしまつて、その三つ葉さ  
え大へん小さく縮まつてしまつたように思われました。

わたくしどもはどんどん走りつづけました。

「そら、あすこに一つあかしがあるよ。」

ファゼーロがちよつと立ちどまつて右手の草の中を指さしまし  
た。その草穂のかけに小さな小さなつめくさの花が、青白くさ  
びしそうにぽつと咲いていました。

俄かに風が向うからどうつと吹いて来て、いちめんの暗い草穂  
は波だち、私のきもののすきまからは、その冷たい風がからだ一  
杯に浸みてきました。

「ふう。秋になつたねえ。」わたくしは大きく息をしました。

フアゼーロがいつか上着は脱いでわきに持ちながら、

「途中のあかりはみんな消えたけれども……。」

おしまい何と云ったか、風がざあつとやって来て声をもって行つてしまいました。

そのとき、わたくしは二人の大きな鎌をもった百姓が、わたくしどもの前を横ぎるように通つて行くのを見ました。その二人もこつちをちらつと見たようでしたが、それから何かはなし合つてとまって、わたくしどもの行くのを待っているようすです。わたくしどもも急いで行きました。

「やあ、お前さん帰つて来さしやつたね。まずご無事で結構でした。」一人がわたくしに挨拶しました。

この前ポラーノの広場でデストウパーゴに介添かいぞえをしろと云われて遁げた男のようでした。

「ええ、ありがとう。ファゼーロも帰って来てすっかりもとの通りですね。」

「山猫博士が居ませんや。」

「山猫博士？ デストウパーゴ？ デストウパーゴにわたしはセンドードで会いましたよ。大へんおちぶれて気の毒なくらいだった。」

「いいえ、デストウパーゴが落ちぶれるもんですか。大将、センドードのまちにたくさん土地を持っていますよ。」

「はてな、財産はみんなあの乾溜会社にかけてしまったと云って

いたが。」

「どうして、どうして、あの山猫がそんなことをするもんですか。会社の株が、ただみたいになつたから大将遁げてしまったんです。」

「いや、何か重役の人が醸造の方へかかろうとして手続を欠いて責任を負つたとか云つていたが。」

「どうしてどうして。酒をつくることなんかみんな大将の考えなんですよ。」

「だって試験的にわずかつくつただけだそうじゃないですか。」

「あなたはよつぽどうまくだまされておいですよ。あの工場からアセトンだと云つて樽詰たるめにして出したのはみんな立派な混成

酒でさあ。悪いのには木精もませたんです。その密造なら二年もやっていたんです。」

「じゃポラーノの広場で使ったのもそれか。」

「そうですとも。いや何と云つても大将はするいもんですよ。みんなにも弱味があるから、まあこのまま泣寝入でさあ。ただまああの工場をこんどはみんなでいろいろに使つて、できるだけお互いのいるものは拵えようというんです。」

「そうかねえ。」「ファゼーロが何かするのかい。」

「ええ、まあ別に新らしい資本がかかるわけでもなし、革をなめしたりハムを拵えたり、栗を蒸して乾かしたり、そんなことをいろいろやろうというんです。」

「さあもう行こう。」ファゼーロがわたくしをつつきました。

「それじゃまた。」

「お休みなさい。」

どうもデストウパーゴの云ったのが本当か、みんなの云うのが本当か、これはどうもよくわからないと、わたくしはあるきだしながらおもいました。

「まっすぐだよ、まっすぐだよ。わたくしはあれからもう何べんも来てわかっているから。」

わたくしはファゼーロの近くへ行つて風の中で聞えるように云いました。ファゼーロはかすかにうなずいて、また走りだしました。夕暗のなかにその白いシャツばかりぼんやりゆれながら走り

ました。

間もなくわたくしははるかな野原のはてに青白い五つばかりの  
あかりと、その上に青く傘のようになってぼんやりひかっている、  
この前のはんのきを見ました。だんだん近づいて行くと、その葉  
が風にもまれて次から次と湧いているよう、枝と枝とがぶつつか  
り合つて、じぶんから青白い光を出しているようなのもわかるよ  
うになり、またその下に五人ばかりの黒い影が魚をとったりする  
ときつかう、アセチレン燈をもつて立っているのも見ました。今  
日は広場にはテーブルも椅子も箱もありませんでした。ただ一つ  
のから箱があるきりでした。そのなかから見覚えのある、大きな  
帽子、円い肩、ミーロがこつちへ出て来ました。



「とうとう来たな。今晚は、いいお晩でございます。」

ミーロはわたくしに挨拶しました。みんなも待つていたらしく口々に云いました。わたくしどもは、そのまま広場を通りこしてどンドン急ぎました。

のはらはだんだん草があらくなって、あちこちには黒い藪も風に鳴り、たびたび柏の木か樺の木かが、まつ黒にそらに立つて、ざわざわざわざわゆれているのでした。そしていつか私どもは細いみちを一行にならんであるいていたのです。

「もうじきだよ。」ファゼーロが一番前で高く叫びました。

みちの両側はいつかすっかり林になっていたのです。そして三十分ばかりだまって歩くと、なにかふうんと木屑のようなものの

匂がして、すぐ眼の前に灰いろの細長い屋根が見えました。

「誰か来ているな。」ファゼーロが叫びました。

その大きな黒い建物の窓に、ちらちらあかりが射しているので  
す。

「おおい、キューストさんが来たぞ。」ミーロが高く叫びました。

「おおい。」中からも誰かが返事をしました。

私どもはその建物の中へ入って行きました。そこに巨きな鉄の  
罐かんが、スフィックスのように、こつちに向いて置いてあつて、土  
間には沢山の大きな素焼すやきの壺が列んでいました。

「いや今晚は。」ひとりのはだしの年老った人が土間で私に挨拶  
しました。

「これが乾燥罐かんだよ。」フアゼーロが云いました。

「ここで何人稼いでいたつて。」私はたずねました。

「そうねえ、盛んにもうかつたときは三十人から居たろう。」ミ  
ーロが答えました。

「どうしてだめになつたんだ。」

みんなが顔を見合せました。さっきの年老つた人が云いました。

「薬のねだんが下つたためです。」

「そうですかねえ。そんなに間に合わないのかなあ。ところが、  
ねえおい。フアゼーロ、おれはこの釜でやっぱり醋酸さくさんをつくつ  
た方がいいと思う。あのときは会社だなんて、あんまりみんなで  
やったから損になつただけけれども、おれたちだけでやるんなら、

手間にはきつとなるからな。十瓶だつて二十瓶だつて引き受ける  
と町の薬屋でも云つてくるからな。」

「そうだ。」ファゼーロが云いました。

「ここの下へたい煙を、となりの酒をつくつたむろに通して、  
あすこでハムをつくるといいな。」

「それはサートもそう云つてるよ。とにかくこの罐へ入れてやれ  
ば、木炭はそつくりとれるしさ、ハムもすぐには売れなくたつて  
仲間へだけは頒<sup>わ</sup>けられるからな。」

「さあよし、やろう。キューストはたびたび来て見てくれるだろ  
う。」

「ああ、ぼくは畜産の方にも林産製造の方にも友だちがあるから、

みんなさそつて来てやるよ。ポラーノの広場のはなしをしてね。」

「そうだ、ぼくらはみんなで一生けん命ポラーノの広場をさがしたんだ。けれども、やつとのことでそれをさがすと、それは選挙につかう酒盛りだった。けれども、むかしのほんとうのポラーノの広場はまだどこかにあるような気がしてぼくは仕方ない。」

「だからぼくらは、ぼくらの手でこれからそれを拵えようでないか。」

「そうだ、あんな卑怯な、みつともない、わざとじぶんをごまかすような、そんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行つて歌えば、またそこで風を吸えば、もう元気がついてあしたの工作中からだいつぱい勢がよくて面白いような、そういうポラーノの広場をば

くらはみんなでこさえよう。」

「ぼくはきつとできるとおもう。なぜならぼくらがそれをいまか  
んがえているのだから。」

「何をしようといつてもぼくらはもつと勉強しなくてはならない  
と思う。こうすればぼくらの幸になるということはわかつていて  
も、そんならどうしてそれをはじめたらいいか、ぼくらにはまだ  
わからないのだ。町にはたくさんの方があって、そこにはたく  
さんの学生がいる。その人たちはみんな一日一ぱい勉強に時間を  
つかえるし、いい先生は覚えたいくらい教えてくれる。ぼくらに  
は一日に三時間の勉強の時間もない。それも大ていはずかされてね  
むいのだ。先生といったら講義録しかない。わからないところが

できて質問してやってもなかなか返事が来ない。けれどもぼくたちは一生けん命に勉強して行かなければならない。ぼくはどうかしてもっと勉強のできるようになしかたをみんなでやりたいと思う。

その子どもは坐りました。

わたくしは思わずはねあがりました。

「諸君、諸君の勉強はきつとできる。きつとできる。町の学生たちは仕事に勉強はしている。けれども何のために勉強しているかもう忘れていた。先生の方でもなるべくたくさん教えようとして、まるで生徒の頭をつからしてぐったりさしている。そしてテニスだのランニングも必要だと云って盛んにやっている。諸君はテニ

スだの野球の競争だなんてことはやらない。けれども体のことならもうやりすぎるくらいやっている。けれどもどつちがさきに進むだろう。それは何といつても向うの方が進むだろう。そのときぼくらはひどい仕事をしたほかに、どうしてそれに追い付くか。さつき諸君の云う通りだ。向うは何年か専門で勉強すればあとはゆつくりそれでくらしして、酒を呑んだりうちをもったり、だんだん勉強しなくなる。こつちはいつまでもいまの勢で一生勉強して行くのだ。

諸君、酒を呑まないことで酒を呑むものより一割余計の力を得る。たばこをのまないことから二割余計の力を得る。まっすぐに進む方向をきめて、頭のなかのあらゆる力を整理することから、



乱雑なものにくらべて二割以上の力を得る。そうだあの人たちが女のことを考えたり、お互の間の喧嘩のことでつかう力をみんなぼくらのほんとうの幸をもつてくることにつかう。見たまえ、諸君はまもなくあれらの人たちへくらべて倍の力を得るだろう。けれどもこういうやりかたをいままでのほかの人たちに強いことはいけない。あの人たちは、ああいう風に酒を呑まなければ、淋しくて寒くて生きていられないようなときに生れたのだ。

ぼくらはだまってやって行こう。風からも光る雲からも諸君にはあたらしい力が来る。そして諸君はまもなくここへ、こここの野原へむかしのお伽ときばなし噺よりもつと立派なポラーノの広場をつくるだろう。」

みんなはよろこんで叫びだしました。ファゼーロが云いました。「ぼくらはねえ、冬の間勉強しよう。みんなで同じ本を読んで置いて、五日に一晩あすこの工場に集って、かわるがわるたずねたり教えたりすることをしよう。ねえ、キュースト。あなたは何か教えてくれるだろう。」

「ああ、ぼくはねえ、前に植物の先生をしたから、植物の生理のことや、ほかにも何か三つぐらいは教えてあげるよ。それはねえ。いままでのようにごたごた要らないことまでおぼえて物知りになることはいらさないんだ。ほんとうに骨組みと要るところだけやればいいんだから。あとは仕事がひとりですれを教えるし、だんだんじぶんで読んで行けるから。」

「ぼくらは冬にあの工場へ集ったりしていろいろこさえようじゃないか。ファゼーロが皮を染めたりするだろう、ぼくはへただけれどもチョツキはつくれるよ。ミーロはいつでも上手に帽子をこしらえているんだから、仕事にやったらもつと上手にできるだろう。」

「そうだそうだ。ぼくらは冬につくつたものをお互で取り換えようねえ。ぼくは木をくつてこしらえるものならすきだよ。」

「やろうやろう。夏にははたけや野原ではたらいて食べるものをとるし、冬にはお互で要るものをこしらえて取りかえれば……。」

ミーロがにわかにな風があんまり烈しく吹いてきたので眼を細くしながら坐りました。はんの木もまるで弓のようになりました。

その風のなかでわたくしはまた立ちました。

「そうだ、諸君、あたらしい時代はもう来たのだ。この野原のなかにまもなく千人の天才がいつしよに、お互に尊敬し合いながら、めいめいの仕事をやって行くだろう。ぼくももうきみらの仲間にはいろうかなあ。」

「ああはいつておくれ。おい、みんな、キユーストさんがぼくらのなかまへはいると。」

「ロザー口姉さんをもらったらいいや。」だれかが叫びました。わたくしは思わずぐくつとしてしまいました。

「いや、わたくしはまだまだ勉強しなければならぬ。この野原へ来てしまつては、わたくしにはそれはいいことでない。いや、

わたくしははいらないよ。はいれないよ。なぜなら、もうわたくしは何もかもできるといふ風にはなっていないんだ。わたくしはびんぼうな教師の子どもにうまれて、ずうつと本ばかり読んで育つてきたのだ。諸君のように雨にうたれ風に吹かれ育つてきていない。ぼくは考えはまったくきみらの考えだけれども、からだはそうはいかないんだ。けれどもぼくはぼくできつと仕事をするよ。ずうつと前からぼくは野原の富をいま三倍もできるようにすることを考えていたんだ。ぼくはそれをやっけて行く。

(原稿約一枚分空白)

そしてわたくしどもは立ちあがりました。

風がどうつと吹いて来ました。みんなは思わず風にうしろ向き

になつてかがみ、わたくしはきつきからあんまり叫んだので風でいっぱいにむせました。はんのきも梢がまるで地面まで届くようでした。

「さあよし、やるぞ。ぼくはもう皮を十一枚あすこへ漬けて置いたし、一かま分の木はもうそこにできている。こんやは新らしいポラーノの広場の開場式だ。」

「それでは酒をさあけのうみずうに水を吞むうとやるか。」その年よりが云いました。

みんなはどつとわらいました。

「よしやろう。表へ出て。おいミール口、おれが水を汲んでくるから、きみは戸棚からコップをだせ。」

フアゼーロはバケツをさげて外へ出て行きました。

みんなはアセチレン燈をもって工場の外の芝生に出ました。

みんなは草に円くなって坐りました。ミーロはみんなにコップをわたしました。フアゼーロがバケツを重そうにさげて来て、

「さあコップを洗うんだぜ。」と云いながらみんなのコップにひしゃくで水をつぎました。

私はその水をつめたいのにふるえあがるように思いました。みんなはこちこち指でコップをあらいました。

「さあまた洗うんだぜ。」フアゼーロが云ってまた水をつぎました。

みんなは前の水を草にすててまた水をそそぎました。

「もう一ぺん洗うんだぜ。前の酒の匂がついてるからな。」ファゼーロがまた水をつぎました。

「ファゼーロ、今夜一ばんコップを洗っているのかい。」

醋酸をつくっていたさっきの年老った人が、云いました。みんなはまたどつと笑いました。

「こんどは呑むんだ。冷たいぞ。」ファゼーロはまたみんなに近づきました。コップはつめたく白くひかり風に烈しく波だちました。「さあ呑むぞ。一二三。」みんなはぐつと呑みました。私も呑んで、がたつとふるえました。

「では僕がうたうぞ。ポラーノの広場のうた。

つめくさのはなの 終る夜は



ポランの広場の 秋まつり

ポランの広場の 秋のまつり

水を吞まずに 酒を吞む

そんなやつらが 威張っている

ポランの広場の 夜が明けぬ

ポランの広場も 朝にならぬ。」

みんなはパチパチ手を叩いてわらいました。その声もすぐ風が  
どうつと来て、むかしのポラーノの広場の方へ持って行ってしま  
いました。

「おれもうたうぞ。」ミールがたちました。

「つめくさの花の しぼむ夜は

ポランの広場の 秋まつり

ポランの広場の 秋のまつり

酒くせの悪い 山猫は

黄いろのシャツで 遠くへ遁げて

ポランの広場は 朝になる

ポランの広場は 夜が明ける。」

「さあぼくも歌うぞ。」

(原稿数行空白)

「さあ叫ぼう。あたらしいポラーノの広場のために。ばんざーい

。」 わたくしは帽子を高くふつて叫びました。

「ばんざあい。」

そして私たちはまつ黒な林を通りぬけて、さっきの柏かしわの疎林そりんを通り古いポラーノの広場につきました。

そこにはいつものはんのきが風にもまれるたびに青くひかっています。

わたくしどもの影はアセチレンの灯に黒く長くみだれる草の波のなかに落ちて、まるでわたくしどもは一人ずつ巨きな川を行く汽船のような気がしました。

いつものところへ来てわたくしどもは別れました。そこにほんの小さなつめくさのあかりが一つまたともっていました。わたくしはそれを摘つんで、えりにはさみました。

「それではさよなら。また行きますよ。」ファゼーロは云いなが

ら、みんなといっしょに帽子をふりました。みんなも何か叫んだようでしたが、それはもう風にもって行かれてきこえませんでした。そしてわたくしもあるき、みんなも向うへ行つて、その青い、風のなかのアセチレンの灯と黒い影がだんだん小さくなったのです。

それからちょうど七年たったのです。ファゼーロたちの組合は、はじめはなかなかうまく行かなかつたのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。

私はそれから何べんも遊びに行つたり相談のあるたびに友だちにきいたりして、それから三年の後には、とうとうファゼーロた

ちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と醋酸とオートミールはモリーオの市やセクターの市はもちろん、広くどこへも出るようになりました。そして私はその三年目、仕事の都合でとうとうモリーオの市を去るようになり、わたくしはそれから大学の副手にもなりましたし農事試験場の技手もしました。そして昨日この友だちのない、にぎやかながら荒<sup>す</sup>さんだトキーオの市のはげしい輪転機の音のとなりの室で、わたくしの受持ちになる五十行の欄に、なにかものめずらしい博物の出来事をうずめながら一通の郵便を受けとりました。

それは一つの厚い紙へ刷つてみんなで手に持って歌えるようにした楽譜でした。それには歌がついていました。

ポラーノの広場のうた

つめくさ灯ともす 夜のひろば

むかしのラルゴを うたいかわし

雲をもどよもし 夜風にわすれて

とりいれまぢかに 年ようれぬ

まさしきねがいに いさかうとも

銀河のあなたに ともにわらい

なべてのなやみを たきぎともしつつ

はえある世界を ともにつくらん

わたくしはその譜はたしかにファゼーロがつくつたのだとおもいました。

なぜなら、そこにはいつもファゼーロが野原で口笛を吹いていた、その調子がいっぱいにはいっていたからです。けれどもその歌をつくつたのはミーロカロザーロか、それとも誰か、わたくしには見わけがつきませんでした。





## 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜・風の又三郎・ポラーノの広場 ほか三編  
天沢退二郎編」講談社文庫、講談社

入力：白川由紀子

校正：須藤

2002年1月4日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# ポラーノの広場

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>